秋　山　古　墳　群　Ⅱ

―秋山塚原地区 C 地点の調査―

２０２０

本庄市教育委員会

序

埼玉県北部にある本庄市は、明治時代の競進社模範蚕室に代表されるように養蚕・製糸業の生産・流通の拠点であり、また、江戸時代の国学者である塙保己一を輩出するなど、多彩な文化的背景を持つ自治体として知られております。市のまちづくりの将来像を「あなたといかす、みんなで育む、歴史と教育のまち　本庄　～世のため　後のため～」と定め、歴史教育にも力を入れております。遺跡・遺物などの埋蔵文化財についても本庄市は量・質ともに豊かな内容を持っており、それぞれの時代、地域においてそれぞれの歴史像を紡げる様な調査・研究の蓄積があります。

本書に報告する秋山古墳群は県の重要遺跡として選定されており、現存する古墳が多いことが特徴の一つとなっております。また研究者の間では古くからその名を知られ、秋山古墳群中の秋山庚申塚古墳の発掘調査では、豊富な出土品や二重に巡る周溝の発見など、重要な成果が得られています。

今回報告する地点では、弥生時代の集落跡、隣接地に墳丘が残る秋山古墳群第91号墳と、さらに江戸時代の溝跡等を含む複合的な遺跡の様子が明らかになりました。特に弥生時代の竪穴住居址は前期末～中期初頭頃のものであり、その検出例が少ないことから重要な成果となりました。

本書は市道の拡幅工事に先立って実施した発掘調査の成果をまとめたものでありますが、本庄市の歴史を考えるうえで重要な資料の一つになるものと思われます。また、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史や遺跡を理解する一助として、多くの皆様にひろくご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地の発掘調査から整理・報告書の刊行にあたり、地元の関係者をはじめとし、関係諸機関の皆様に対しまして、心からお礼を申し上げます。

令和２年３月

本庄市教育委員会
教育長　勝山　勉

例　言

・本書は、市道２級 14 号線拡幅工事に伴い事前調査された秋山古墳群秋山塚原地区Ｃ地点の発掘調査報告書である。
・本遺跡は、埼玉県本庄市児玉町秋山 1464 番２・1464 番５・1488 番９に所在する。
・発掘調査は、本庄市教育委員会が実施し、松本完・的野善行が担当した。なお、現地調査は株式会社測研の櫻井 和哉が専従した。
・発掘調査期間は平成 30 年７月 20 日～平成 30 年 10 月 11 日である。
・整理調査及び発掘調査報告書刊行は、株式会社測研に委託した。
・整理調査及び発掘調査報告書刊行の作業期間は令和元年８月１日～令和２年３月 10 日である。
・本書の執筆は、第Ⅰ章を本庄市教育委員会文化財保護課、第Ⅴ章第２節を高林真人 (株式会社測研)、付編を株式会社パレオ・ラボ、その他は櫻井が行い、編集は櫻井と高林が行った。
・出土した遺物及び各種原図・写真などの記録類は本庄市教育委員会が保管している。
・発掘調査及び整理調査・報告書刊行に関する組織は、以下の通りである。

発掘調査・整理調査・報告書刊行組織（平成 30 年度・平成 31 年度（令和元年度））

主体者	本庄市教育委員会	教育長	勝山　勉	
事務局		事務局長	高橋　利征	
	文化財保護課	課長	佐々木　智恵	
		課長補佐兼埋蔵文化財係長	恋河内　昭彦	
		主査	塩原　浩	
		主査	徳山　寿樹	（平成 30 年度）
		主任	的野　善行	
		主事補	水野　真那	（平成 31 年度）
		専門員	松本　完	
		臨時職員	中嶋　淳子	
		調査員	櫻井　和哉	（株式会社測研）

凡　例

・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用している。
・遺構挿図中に使用した座標値は世界測地系によるものであり、方位記号は座標北を示している。
・セクション図に付した数値（Ｌ＝）は、標高を表す。
・土層注記及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1998 年版）』を使用した。
・遺構には次の略号を使用した。

　　ＳＫ＝土坑　　ＳＤ＝溝状遺構

・本報告書では、次の火山噴出物の略号を使用した。

　　Ａｓ－Ａ＝浅間Ａ軽石　　Ａｓ－Ｂ＝浅間Ｂテフラ　　Ａｓ－ＢＰ＝浅間一板鼻褐色軽石
　　Ｈｒ－ＦＡ＝榛名一二ツ岳渋川テフラ

・遺構の実測図は、調査区全体図を１/300、古墳の平面図・断面図を１/80、竪穴住居址の平面図・断面図を１/60、１号・３号・４号溝状遺構の平面図・断面図を１/100、２号溝状遺構の平面図・断面図を１/80、土坑の平面図・断面図を１/60 で掲載した。
・遺物の実測図は、復元実測を１/ ４、破片実測及び断面実測を１/ ３で掲載した。
・遺物実測図の割れ口は、輪積み・積み上げ部分で割れていると判断したものは実線で表している。
・出土した遺物の注記は、秋山古墳群・遺構名・出土層位などを記入した。
・本報告書で使用した地図は下記の通りである。

　◎国土地理院　地形図　「本庄」　１/25,000
　◎本庄市都市計画基本図 33・34・38　　１/2,500

・遺物実測図に使用したトーンは以下の通りである。

　釉薬範囲　　須恵器断面

目　次

序
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　基本層序 …… 4
第Ⅳ章　調査の方法と経過 …… 4
　第１節　調査の方法 …… 4
　第２節　調査の経過 …… 6
第Ⅴ章　遺構と遺物 …… 6
　第１節　遺構の概要 …… 6
　第２節　出土遺物 …… 15
第Ⅵ章　総括 …… 23
参考文献 …… 24
付編 …… 25
写真図版

挿図目次

第１図　調査区位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡と本庄市の地形 …… 3
第３図　調査区全体図 …… 5
第４図　基本層序 …… 5
第５図　91号墳平面図及び断面図 …… 9
第６図　１～４号住居址平面図及び断面図① …… 10
第７図　１～４号住居址断面図② …… 11
第８図　１・３・４号溝状遺構平面図及び断面図 …… 12
第９図　２号溝状遺構平面図及び断面図 …… 13
第10図　１～３号土坑平面図及び断面図 …… 13
第11図　１～３号住居址、91号墳、１・２号溝状遺構出土遺物実測図 …… 17
第12図　遺構外出土遺物実測図① …… 18
第13図　遺構外出土遺物実測図② …… 19
第14図　弥生時代住居址の覆土（北壁）のテフラ分析結果 …… 26
第15図　古墳時代住居址の覆土（南壁）のテフラ分析結果 …… 27
第16図　各覆土中の火山ガラスの屈折率測定結果 …… 27
第17図　堆積物中のテフラ粒子 …… 29

挿表目次

第１表　出土土器観察表 …… 20
第２表　出土埴輪観察表 …… 22
第３表　出土土製品・金属製品観察表 …… 22
第４表　分析試料とその特徴 …… 25
第５表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果 …… 26
第６表　４φ篩残渣中の鉱物組成 …… 26

写真図版

図版１　調査区全景（東半）上が北
　　調査区全景（西半）上が北
図版２　調査区遠景（西半調査時）南東から
　　調査区遠景（西半調査時）東から
図版３　91号墳全景　南西から
　　91号墳全景　上が北
　　91号墳周溝（西側）全景　北東から
　　91号墳周溝（東側）全景　北西から
　　91号墳セクションＡ　南から
　　91号墳セクションＢ　南から
　　91号墳セクションＣ（倒木痕）東から
　　地境隅に集積された石室石材　南東から
図版４　１号住居址（床面）全景　北西から
　　１号住居址（掘方）全景　南西から
　　２号住居址（床面）全景　南東から
　　２号住居址遺物出土状況　南から
　　３号住居址（床面）全景　南東から
　　１～４号住居址セクションＡ
　　（北東半）　北西から
　　１～４号住居址セクションＡ
　　（南西半）　北西から
　　１～４号住居址セクションＢ　北東から
図版５　１～４号住居址セクションＣ
　　（西寄り）　南から
　　１～４号住居址セクションＣ
　　（東寄り）　南から
　　１～４号住居址セクションＤ　北から
　　ＳＤ１全景　北西から
　　ＳＤ１・３・４全景　北西から
　　ＳＤ１・３・４セクション
　　（調査区西半調査時）　北西から
　　ＳＤ１・３・４セクション
　　（調査区東半調査時）　北から
　　ＳＤ２全景　北西から
図版６　ＳＤ２セクション　北から
　　ＳＫ１全景　東から
　　ＳＫ１セクション　北から
　　ＳＫ３全景　東から
　　ＳＫ３セクション　北から
　　ＳＫ４全景　東から
　　ＳＫ４セクション　北から
　　９月３日調査区冠水の状況　西から
図版７　遺構出土遺物写真
図版８　遺構外出土遺物写真

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

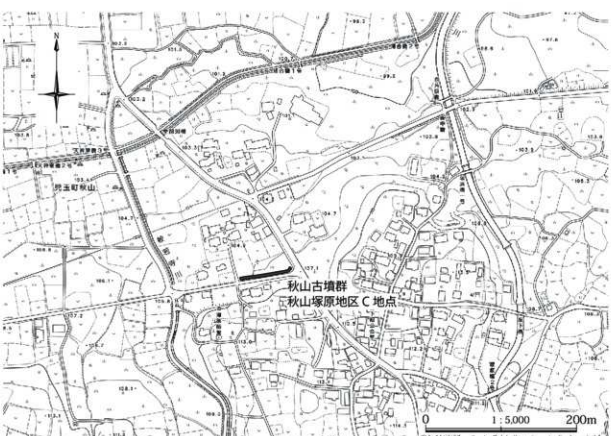
埼玉県本庄市は本庄市児玉町秋山に所在する市道２級 14 号線の拡幅工事を計画し、平成 29 年５月 30 日付けで「埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」の照会文書を本庄市教育委員会（以下、市教委）宛てに提出した。市教委は埼玉県埋蔵文化財包蔵地地図を確認したところ、工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「秋山古墳群」（県遺跡番号 54-053、いずれも当時）に該当していることが判明した。

市教委は埋蔵文化財の保存計画立案のため、平成 29 年８月 24 日～８月 31 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、当該工事予定地内に古墳の周溝、竪穴住居址等の埋蔵文化財が所在することが確認され、市教委は本庄市宛てに調査結果とともに、検出された埋蔵文化財の現状保存が望ましいことを伝えた。

市教委と本庄市は文化財の保存に関する協議を行ったが、事業実施にあたって遺跡の現状保存を行うことが困難であるとの結論に達し、検出された埋蔵文化財についてはやむを得ず記録保存の措置を採ることで合意した。

発掘調査は平成 30 年７月 20 日～ 10 月 11 日に実施された。

法的手続きについては、本庄市長吉田信解より平成 29 年５月 30 日付けで提出された「埋蔵文化財の発掘通知」を、市教委は平成 29 年 10 月３日付け本教文発第 168 号にて県教委宛て進達した。これを受けて、県教委は平成 29 年 10 月 11 日付け教文資第 4-1018 号にて「事前の発掘調査が必



第１図　調査区位置図

要である」旨の通知を本庄市長宛てに通知した。また文化財保護法第99条による発掘調査通知は平成30年7月19日付け本教文発第127号にて市教委から県教委宛てに提出された。

出土した文化財についての埋蔵物発見届は平成30年10月23日付け本教文発第237号で市教委より児玉警察署宛て提出され、出土文化財保管証は平成30年11月8日付け本教文発第249号で市教委より県教委宛て提出された。県教委は平成30年12月25日付け教文資第7-165号にて「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」を本庄市長宛てに通知した。

（本庄市教育委員会事務局）

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境

本庄市は埼玉県北西部の群馬県境に位置する。市域にはJR高崎線、JR八高線などの鉄道路線、国道17号、国道254号などの主要道が走り、上越新幹線本庄早稲田駅や関越自動車道本庄児玉インターチェンジが所在するなど交通の要衝となっている。

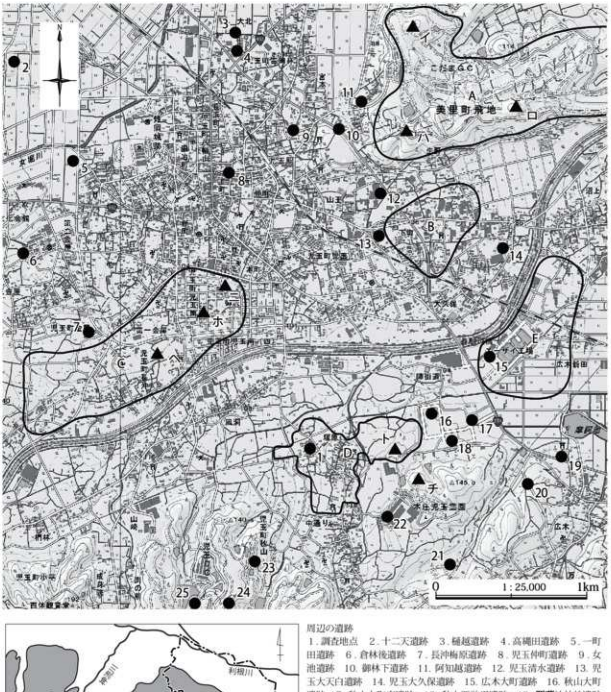
本庄市の地形を概観すると、南西側の一角を上武山地が占め、八王子―高崎構造線を境界に新第三紀層からなる児玉丘陵・松久丘陵に変わる。そこから北東方向へ広く平野部が展開し、利根川が市域の北限となっている。平野部は南西側の北武蔵台地と北東側の妻沼低地から構成されるが、深谷断層に沿ったあたりで台地から低地へ変化する。台地上を流れる主要河川には女堀川や小山川（身馴川）が挙げられる。ともに北東流し、本庄市五十子付近で合流した後は、深谷市域を横断しやがては利根川に注ぐ。女堀川や小山川の流域には沖積地が形成され、この低地帯は下流で妻沼低地に接続する。また、小山川左岸に沿って新第三紀の生野山残丘・浅見山残丘が島状に点在する景観を呈する。

本遺跡は、小山川右岸の区域、松久丘陵北西縁に立地する。丘陵は、小山川支流の小河川や谷戸により開析され入り組んだ地形が形成される。遺跡の周辺地形は、西側を般若寺川、東側を秋山川と小山川支流によって区切られた小規模な丘陵となっており、比較的平坦で北側に緩やかに傾斜している。なお、丘陵北側に広がる水田との比高差は1～3m程度である。

第2節　歴史的環境

本遺跡は、秋山古墳群塚原支群の範囲に所在する。本庄市域における小山川両岸は、古墳時代後期から終末期にかけて群集墳が発達する区域であり、左岸では長沖古墳群、下町古墳群、右岸では秋山古墳群、国道254号をはさんで美里町側に広木大町古墳群が流域に沿って分布している。

秋山古墳群は丘陵北縁部に小山川に沿って帯状に展開しており、その地形的なまとまりから、秋山川を挟んで東側が塚間支群、西側が塚原支群と分けて呼称されている。これまでの発掘調査では、塚間支群では秋山庚申塚古墳が直径34mの円墳で2重の周溝と葺石を伴う模様積みの両袖型胴張り横穴式石室であることが分かっており、塚原支群では塚原1号墳が帆立貝式前方後円墳であることが明らかになっている。現在、古墳群は43基ほどの古墳が残存するが、元々は100基以上の規模であったとされている。秋山古墳群から独立してやや離れた南側の丘陵上に全長50～60m規模で横穴式石室を伴う前方後円墳である秋山諏訪山古墳が所在するが、立地・墳形・規模から一帯の首長墓として位置付けられるものである。



周辺の遺跡

1. 調査地点　2. 十二天遺跡　3. 樋越遺跡　4. 高縄田遺跡　5. 一町田遺跡　6. 倉林後遺跡　7. 長沖梅原遺跡　8. 児玉仲町遺跡　9. 女池遺跡　10. 御林下遺跡　11. 阿知越遺跡　12. 児玉清水遺跡　13. 児玉大天白遺跡　14. 児玉大久保遺跡　15. 広本大町遺跡　16. 秋山大町遺跡　17. 秋山大町東遺跡　18. 秋山諏訪平遺跡　19. **瓜巻**神社前遺跡　20. 広本上原遺跡　21. 秋山郷戸遺跡　22. 秋山東遺跡　23. 秋山神原遺跡　24. 般若寺跡　25. 秋山中山遺跡

周辺の古墳群

A. 生野山古墳群　B. 下町古墳群　C. 長沖古墳群　D. 秋山古墳群　E. 広本大町古墳群

主要な古墳

イ. 生野山義子塚古墳　ロ. 生野山将軍塚古墳　ハ. 物見塚古墳　ニ. 長沖31号墳　ホ. 長沖32号墳　ヘ. 長沖79号墳　ト. 秋山庚申塚古墳　チ. 秋山諏訪山古墳

本庄市の地形（左図：縮尺任意）

台地　丘陵　山地

第２図　周辺の遺跡と本庄市の地形

古墳群の形成は６世紀後半に開始されるが、周辺における該期の遺跡には、秋山諏訪平遺跡、秋山大町遺跡、秋山大町東遺跡などが挙げられる。これらの遺跡群では面的な発掘調査が行われ、竪穴住居址の濃密な分布が確認されている。秋山古墳群東側に広がる丘陵縁辺部の緩斜面地に所在する立地からして古墳群（墓域）に対応する集落域として想定される。また、付近では秋山東遺跡、秋山西部遺跡群（秋山中山遺跡）、秋山郷戸遺跡などの遺跡も見受けられる。これらは丘陵奥地に設営された集落遺跡であるが、例えば木工、漆工、窯業、鍛冶、製炭など山林資源を活用した生業に基盤を置いていた可能性があり、一般的な集落遺跡とは性格を異にするものと思われ注視すべき点も多い。
（櫻井和哉）

第Ⅲ章　基本層序（第４図）

観察の結果、Ⅰ～Ⅴ層に分層した。Ⅰ層は表土。層厚 10 ～ 40㎝程度。Ⅰａ・ｂ層の２層に細分した。As － A 及び As － B を含む耕作土で、Ⅰｂ層は、As － B の混入が目立つ。Ⅱ層は As － A を含まず、As － B が混入する褐色土。Ⅲ層はローム漸移層である。Ⅳ層はローム層。層厚 70㎝程度。特徴によりⅣａ～Ⅳｄ層の４枚に分層される。このうちⅣｃ層では、粘土化した白色粒子が認められるが、層序関係から As － BP に対比される可能性がある。Ⅴ層は灰白色粘土層。10㎝程度掘り下げたところで砂礫混じりの粘土層に変化し、それより下層は確認できない。Ⅴ層が遺跡の基盤層となるが、その特徴から、段丘堆積物または扇状地堆積物の可能性が指摘される。また、Ⅳ層とⅤ層の境界には酸化鉄の凝集層が認められ、そこから絶えず地下水の流出があった。

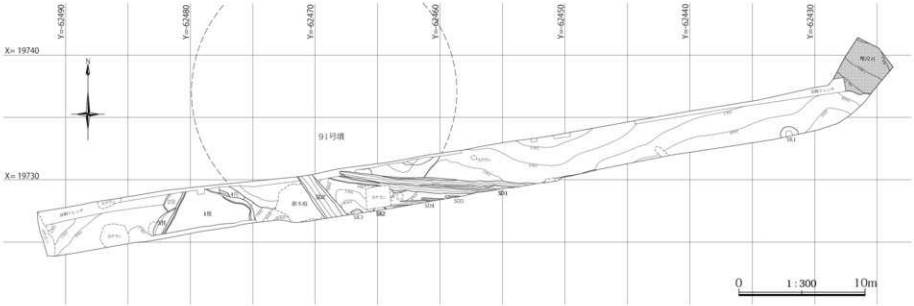
なお、調査区の地形は、全体的に南側から北側へ向かって緩やかに傾斜し、標高は区域内の最高点で 104.9m、最低点で 104.4 m を測る。また、調査区東側には、北側の小山川に向かって開くやや深い谷地が入り込んでいるが、調査区東端ではこの谷地へ向かう落ち込みが検出された。また、調査区西寄りでは北西方向へ向かう傾斜も認められ、滞水の影響によるローム土の粘土化も看取されることから調査区西側の区域には埋没谷の存在も推測される。

第Ⅳ章　調査の方法と経過

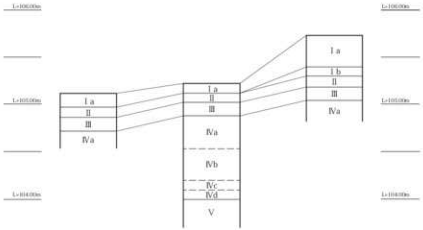
第１節　調査の方法

調査対象面積は約 400㎡である。しかし、調査区南側は現道と隣接し、遺構確認面と路面との高低差が顕著で、場所により 1.8 m以上に達する深所もあるため、安全性を考慮して段掘りないし法面をつけて掘削したことから実質調査面積は 245㎡まで減少した。また、調査地周辺に残土置場が確保できず、残土は場内で処理する必要があるため、調査区を東西に二分割しての反転調査となった。Ⅰ層からⅢ層までを表土扱いとし、バックホーにより除去した。Ⅳ層上面で遺構確認を行い検出された遺構に対して調査を行った。なお、調査区は雨水や地下水によりしばしば冠水し調査の進行に支障をきたす場面があった。開渠とカマ場を掘削、水中ポンプを設置し適宜排水することで対応する必要があった。

測量の方法であるが、基準点・水準点の設置及び平面図の作成は GPS・トータルステーションを用いて行い、断面図の作成は写真測量により行った。図面縮尺は全体図 100 分の 1、平面図 40 分の 1、



第3図　調査区全体図



基本層序

Ⅰa	にぶい黄褐色土	10YR4/3　As-A多量、炭化物微量含む。粘性・締まり共にあり。
Ⅰb	暗褐色土	10YR3/3　As-A・As-B少量含む。粘性・締まり共にあり。
Ⅱ	暗褐色土	10YR3/3　As-B少量含む。粘性・締まり共にあり。
Ⅲ	にぶい黄褐色土	10YR4/3　ローム漸移層。粘性・締まり共にあり。
Ⅳa	明黄褐色土	10YR6/8　ソフトローム。層厚20～30cm。粘性強く、締まりあり。
Ⅳb	明黄褐色土	10YR6/8　ハードローム。層厚40～50cm。粘性・締まり共に強い。
Ⅳc	明黄褐色土	10YR6/8　ローム。粘土化した白色粒子少量含む。層厚6～8cm。粘性・締まり共に強い。
Ⅳd	黄褐色土	10YR5/8　ローム。b～cに比べ相対的に軟らかい。粘性強く、締まりあり。
Ⅴ	灰白色粘土	2.5Y8/2　上層15cmより下は砂礫混交する。粘性強く、よく締まる。

第4図　基本層序

断面図 20 分の 1 である。

写真撮影は、調査状況の記録及び調査区全景の空中写真撮影にはデジタルカメラ（APS-C サイズ）を使用した。また空中写真撮影はドローンで行った。

なお、今回の調査では 1 号住居址及び 2 号住居址を対象にテフラ分析を行った。2 号住居址は、弥生時代前期の土器のみを伴出しており、調査時点では遺構の帰属年代も当該期に比定される可能性があった。しかしながら周辺地域における弥生時代前期の遺跡の分布状況を踏まえるに、竪穴住居址の検出は希少である点、遺物も覆土中からの出土で一括性を欠く点から、判断には慎重を期する必要があると思われた。このため、テフラ分析から覆土の年代比定を行い、その裏付けとすることを試みた。サンプルは 2 号住居址 28 層から採取した。また比較の対象として出土遺物、形状規模から古墳時代後期に比定され、2 号住との新旧関係が明白である 1 号住 3 層からも採取した。

第 2 節　調査の経過

調査期間は 7 月 20 日から 10 月 11 日までの間である。調査は区域外に排土置場が確保できないことから、区域を東西に 2 分しての反転調査となり、調査区東側の区域から着手した。バックホーによる表土除去作業は本庄市教育委員会により 7 月 20 日から 27 日までの間に行われ、Ⅰ層からⅢ層までを掘削した。8 月 1 日より株式会社測研が調査に専従した。東側区域の調査では溝状遺構 1 条、土坑 1 基、ピット 1 基、埋没谷を検出した。ただし、埋没谷は範囲のみを記録し、調査の対象外とした。全ての遺構の完掘後、8 月 3 日にドローンによる空撮を実施し調査が終了した。8 月 6 日から 8 月 10 日の間は本庄市教育委員会によりバックホーによる反転調査に伴う埋め戻しと表土除去作業が行われた。調査は 8 月 13 日～ 16 日の間はお盆休みの中断をはさんで 8 月 17 日より再び株式会社測研が専従した。西側区画では古墳址 1 基、竪穴住居址 4 棟、溝状遺構 4 条（うち 1 条は東側からの続き）、土坑 3 基検出し、調査を行った。調査区西端寄りに井戸址を検出したが、現代のものであるため調査の対象外とした。遺構分布の希薄な調査区西端 20㎡程度の範囲は、先行して調査を終了させ、排土置場として利用した。9 月 19 日に住居址は床面検出状態までを掘削、その他の遺構は完掘した状態でドローンによる空撮を実施した。その後は住居址掘方の調査を行い、9 月 20 日にテフラ分析用土壌サンプルの採取、9 月 25 日に調査は終了し、10 月 11 日にバックホーによる埋め戻しが終了した。なお、8 月下旬から 9 月上旬は地下水の急激な上昇があり、調査区は常時冠水する状態であった。このため、排水処理に少なからず作業時間を割く場面があり、調査の効率低下と遅延が生じた。当初は雨水によるものと考えていたが、9 月 10 日に至り調査区東脇歩道下に埋設された水道管からの漏水が主たる原因であることが判明した。その修復工事以後は、顕著に地下水帯は低下し状況が改善された。

第Ⅴ章　遺構と遺物

第 1 節　遺構の概要

a. 古墳址

91 号墳（第 5 図）

調査区北壁際に周溝南側の縁辺部を検出した。周溝はブリッジが掘り残され、東西に途切れている。

周溝の幅は内周側を検出していないので計測不能である。深さは周溝西側で 16cm程度、東側はすり鉢状に落ち込んだあと急激な落ち込みを伴い約 63cmに達する。ブリッジ部分は倒木痕によるかく乱を受けるが概ね幅 5m で掘り残されたものと推測される。主軸方位は N － 9 °－ W である。ブリッジは墓道の一部と考えられ、石室が南南東に開口する古墳であったと判断される。古墳の大部分は区域外北側に展開するが、現況からその過半が破壊され削平されている様子が窺われる。また墳丘も盛土の北調査区北壁セクションの観察では、旧表土・墳丘盛土は認められず、後世の削平が墳丘構築面の基底まで及んでいることが確認された。SD1・SD2・4 号住居址と重複し、その新旧関係は SD1・SD2 より古く、4 号住居址より新しい。周溝外周の残存径、地境に残る古墳の形状から概ね直径 21 m程度の円墳であったと推定される。また、ブリッジから周溝西側部分にかけては倒木によるかく乱をうける。倒木痕は SD2 に切られ、覆土に As － B 軽石を含まない点から、古墳時代以降古代以前のものであると判断される。埋没は自然堆積。出土遺物には微量の埴輪片・土師器片が認められ、出土遺物の年代観から古墳址の年代は概ね 6 世紀前半以降に比定される。なお、遺構の検出範囲もわずかであり、本址における埴輪の有無、樹立の状況は不明である。

b. 竪穴住居址

1 号住居址（第 6 図・第 7 図）

全体の 1/2 程度を検出した。主軸方位は N － 28°－ E。概ね規模 1 辺約 6 m 20cm程度で平面形は隅丸正方形を呈するものと思われる。深さは遺構確認面から約 66cmを測る。Ⅱ層に被覆され、Ⅲ層以下を掘り込み、Ⅴ層に達する。遺構の埋没は自然堆積の様相を呈する。7 ～ 9 層は三角堆積に相当するが、ローム土が良く混じった黄褐色の土層で壁上部の崩落に伴い形成された土層であると思われる。11a ～ d 層はローム土や黒褐色土を用いて床面直上に版築状に盛られており、低く土饅頭状の高まりを呈していた。焼土・炭化物やロームの被熱もなく土層も縞状に伸びており、踏みしめられて構築されていることから、カマドに関連した土層ではないと判断される。遺構の平面形は概ね隅丸正方形だが、東隅がやや鈍角に開く。床面は掘方を埋め戻して構築し貼床を施している。また貼床は北東壁から北西壁へかけての外縁では施されていなかった。床面に硬化範囲は認められず、緩やかに南側に向かって傾斜がつく。壁際は周溝が巡るが、北東壁では一部途切れている。出土遺物は土師器片・埴輪片・弥生土器片が少量出土した。なお、カマドなど付帯施設は確認されなかった。主柱穴も床面の精査では判明せず、掘方完掘後も特定できなかった。カマド崩壊土の散布もなく焼土・炭化物もほとんど含まれず、使用痕跡に乏しい。また覆土 4 層から自然礫がまとまって住居址中央に向かってレンズ状に落ち込んだ状態で出土した。掘方は深く床面から 30 ～ 48cm程度で、複数基の土坑が切りあったような状態で掘り込まれている。掘方からは弥生時代前～中期の土器片が出土した。掘削が床面に達する時点で常に湧水する状態で、開渠を開削し排水しながらの調査であったが、掘方は部分的に湧水のため掘り上がりを確認できない状況であった。また、遺構の年代は遺構の規模・形状、出土する土師器片から古墳時代後期の所産と推定されるが、出土量が乏しく出土状態の一括性も欠くため判定は難しい。2 号住居址、3 号住居址、4 号住居址と重複し、新旧関係は一番新しい。直接の重複関係は確認できないが、墓域と居住域の重複は考えづらいので、おそらく古墳に先行するものと考えられる。

2号住居址（第6図・第7図）

東隅と西隅を部分的に検出した。残存範囲から平面は長辺で約4m30㎝、短辺で約3m程度の規模で、深さは遺構確認面から約39㎝を測る。Ⅱ層に被覆され、Ⅲ層を掘り込み、掘方でⅤ層に達する。埋没は自然堆積の様相を呈する。1号住居址、3号住居址、4号住居址と重複し、新旧関係は、重複する中で一番古い。1号住居址との重複によってその過半が破壊されているため、平面形状は不詳だが、やや不整な隅丸方形を呈していたと思われる。床面は平坦で、掘方は土坑状に掘り込まれる。覆土中からは体部にハケ状の条痕と外底部に木葉痕を伴う底部破片をはじめ、少量の弥生土器片が出土している。

3号住居址（第6図・第7図）

北西壁から西隅を部分的に検出した。残存範囲は長軸で約2m50㎝、短軸で約72㎝、深さは遺構確認面から床面までで約38㎝を測る。Ⅲ層を掘り込み、掘方でⅤ層に達する。埋没は自然堆積の様相を呈する。1号住居址、2号住居址と重複し、新旧関係は、1号住居址より古く、2号住居址より新しい。1号住居址との重複によってその過半が破壊されているため、平面形状は不明である。床面は平坦で掘方はすり鉢状に掘りくぼまる。覆土中からは少量の弥生土器片が出土しており、覆土中に弥生時代以外の遺物の混入は認められない。

4号住居址（第6図・第7図）

表土掘削時に床面まで削平が及んでおり、長軸約1m70㎝、短軸約72㎝の範囲で黒色土が斑状に分布する範囲を遺構として認定した。調査区北壁の土層観察から、遺構であることは確定できる。住居址と分類したが、形状・規模及び構造・機能についても不明である。1号住居址、2号住居址、91号墳と重複し、新旧関係は、1号住居址、91号墳より古く、2号住居址より新しい。埋没は自然堆積。出土遺物もなく、覆土は相対的に1号住居址のそれに類似する。

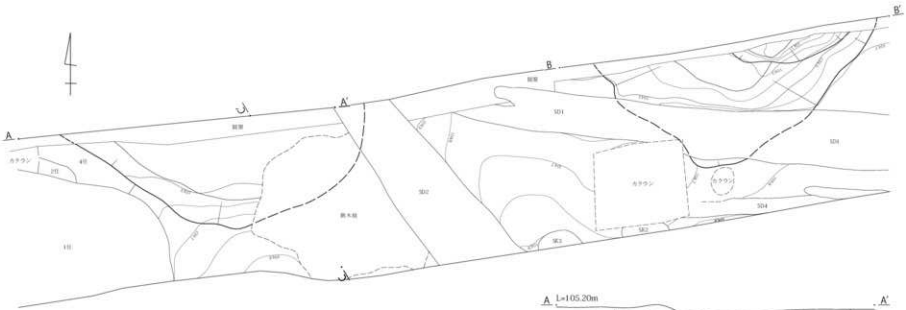
c. 溝状遺構

SD1・SD3・SD4について

遺構検出の段階ではそれぞれに異なる遺構として認識したが、本来は一連の遺構であると判断される。これらの溝状遺構は近接する位置関係で並走し、調査区南壁の土層観察から約4m幅の範囲で複数回掘り直された堀状の遺構であった様子が看取される。SD1は3条の溝跡の重複したものであり、SD4では2条の重複が確認できる。また、確認面では消失しているが、SD1・SD3・SD4を被覆する2～3層の堆積に1条見だすことができ、都合7条の溝跡が累積したものと見なすことができる。なおここでは便宜上番号を付した遺構ごとに事実記載を行い詳細を記す。

SD1（第8図）

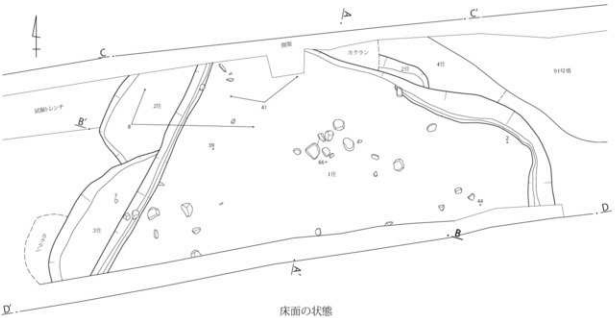
主軸方位はN－87°－W、ほぼ東西方向に直線的な走向で区域内を斜行する。長さ約13m20㎝、幅約1m25㎝、深さは確認面から約10～24㎝を測る。Ⅰa層に被覆されⅠb層を掘り込みⅣ層に達する。セクションの観察と掘方の形状から、本来は断面U字状の溝が3条切りあったものと判断され、同じ場所に累積的に掘り直された様子が窺われる。底面はほぼ平坦で顕著な傾斜は窺われない。



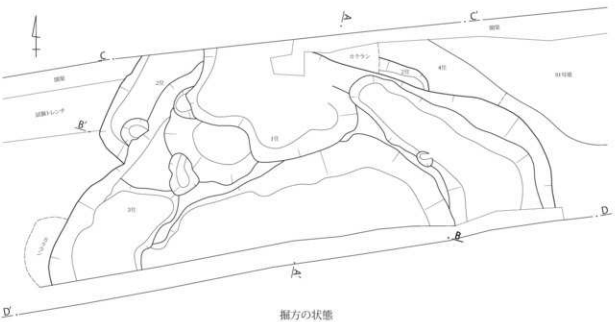
(周溝(西側)北壁セクション)

1	黒褐色土	10YR3/1 白色粒子・ローム粒子少量,焼土粒微量含む,粘性・締まり共にあり。
2	にぶい黄褐色土	10YR4/3 ロームブロック・粒子多量,黒褐色土ブロック少量含む,粘性・締まり共にあり。
3	にぶい黄褐色土	10YR4/3 ロームブロック少量含む,ローム土多く混じる,植生の発達か暗褐色土とローム土が斑状,粘性・締まり共にあり。
4	黒色土	10YR2/1 白色粒子少量,ローム粒子微量含む,基質は粗粒,土器片出土,粘性・締まり共にあり。
5	黒褐色土	10YR3/1 ロームブロック・粒子少量含む,粘性・締まり共にあり。
6	灰黄褐色土	10YR4/2 ロームブロック・粒子少量含む,粘性・締まり共にあり。
7	灰黄褐色土	10YR4/2 ロームブロック・粒子多量含む,植生の発達か暗褐色土とローム土が斑状,粘性・締まり共にあり。
8	黒褐色土	10YR3/2 ロームブロック・粒子多量含む,下層は植生の発達か暗褐色土とローム土が斑状,粘性・締まり共にあり。
9	黒色土	10YR2/1 白色粒子・粒子少量含む,土器片・植輪片・内貝の偏平礫等も混じる,粘性・締まり共にあり,倒木痕。
10	黒褐色土	10YR2/2 ロームブロック・粒子多量含む,粘性・締まり共にあり,倒木痕。
11	灰黄褐色土	10YR4/2 ローム粒子多量,ロームブロック少量含む,粘性・締まり共にあり,倒木痕。
12	にぶい黄褐色土	10YR4/3 ロームブロック・ローム粒子多量含む,粘性・締まり共にあり,倒木痕。
13	にぶい黄褐色土	10YR5/4 ソフトローム主体,解れて暗褐色土と混交,ロームブロック・粒子多量含む,粘性・締まり共にあり,倒木痕。
14	明黄褐色土	10YR6/6 ロームブロック(ハードローム)主体,基質もローム,粘性強く,よく締まる,倒木痕。
15	明黄褐色土	10YR6/8 ソフトローム主体,倒木の腐蝕により落ち込んだIV層上層,堆積構造の乱れあり,粘性強く・締まりあり,倒木痕。

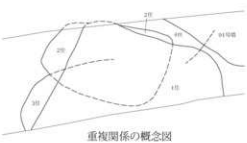
第5図　91号墳平面図及び断面図



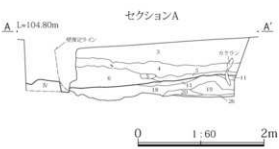
床面の状態



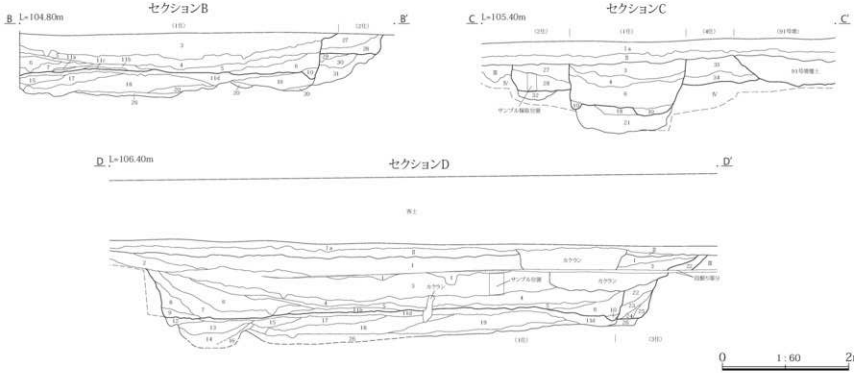
掘方の状態



重複関係の概念図

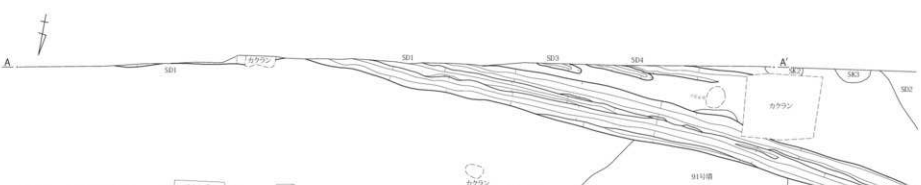


第６図　1～4号住居址平面図及び断面図①



1　黒褐色土　10YR3/1　白色粒子中盤、ローム粒子少盤含む。白色粒子は褐色味あり。As-Bの可能性有。基質はやや粗粒。粘性・締まり共にあり。
2　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒子中盤、ローム・ブロック少盤含む。粘性・締まり共にあり。
3　黒色土　10YR1.7/1　白色粒子少盤、ローム・ブロック・粒子微盤含む。粗砂で軽石等を多く含む土が基質となるが、粘性・締まり共にあり。
4　黒色土　10YR1.7/1　白色粒子・ローム粒子・焼土粒微盤含む。基質は粗粒だが上層より緻密。下層との漸移層。粘性・締まり共にあり。
5　黒褐色土　10YR3/2　ローム・ブロック・ローム粒多盤含む。粘性・締まり共にあり。
6　黒色土　10YR2/1　白色粒子・ローム粒子・焼土粒微盤含む。粘性・締まり共にあり。
7　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム・ブロック・粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。
8　黄褐色土　10YR5/6　ローム主体。ローム・ブロック多盤含む。地山土体の二角堆積。粘性強く、締まりあり。
9　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム・ブロック中盤含む。粘性・締まり共にあり。
10　黒色土　10YR2/1　ローム粒子微盤含む。(腐植)粘性・締まり共にあり。
11a　明黄褐色土　10YR6/8　ローム・ブロック主体。(貼床状)粘性強く、締まりあり。
11b　明黄褐色土　10YR6/8　ローム・ブロック主体。灰白色粘土ブロック少盤含む。(貼床状)粘性強く、締まりあり。
11c　黒褐色土　10YR3/1　ローム・ブロック・粒子少盤含む。(貼床状)粘性・締まり共にあり。
11d　灰黄褐色土　10YR5/2　ローム・ブロック・粒子多盤、灰白色粘土ブロック少盤含む。貼床。粘性・締まり共にあり。よく締まる。
12　褐色土　10YR4/4　ローム・ブロック少盤含む。粘性・締まり共にあり。
13　暗褐色土　10YR3/3　ローム・ブロック少盤、ローム粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。
14　黄褐色土　10YR5/6　ローム土主体。ローム・ブロック多盤、灰白色粘土ブロック少盤含む。粘性強く、締まりあり。
15　黒褐色土　10YR3/1　ローム・ブロック・粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。
16　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム・ブロック・粒子多盤含む。粘性強く、締まりあり。
17　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム・ブロック・粒子多盤含む。粘性・締まり共にあり。
18　黒褐色土　10YR3/1　ローム・ブロック・粒子中盤含む。粘性・締まり共にあり。
19　黒色土　10YR2/1　ローム・ブロック・ローム粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。相対的に締まる。
20　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム・ブロック・粒子多盤含む。3(住)側方または貼床。(3)住層編が)粘性強く、締まりあり。
21　灰黄褐色土　10YR5/2　ローム・ブロック多盤、ローム粒子中盤、白色粘土ブロック少盤含む。粘性強く、締まりあり。
22　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒子微盤含む。粘性・締まり共にあり。
23　暗褐色土　10YR3/3　ローム・ブロック・粒子少盤含む。ローム土良く混じる。粘性・締まり共にあり。
24　暗褐色土　10YR3/4　ローム・ブロック・粒子多盤含む。粘性・締まり共にあり。
25　黄褐色土　10YR5/8　ローム主体。粘性強く、締まりあり。
26　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム・ブロック・粒子多盤、白色粘土少盤含む。3(住)側方または貼床。粘性強く、締まりあり。
27　黒色土　10YR2/1　ローム・ブロック・粒子微盤含む。粘性・締まり共にあり。
28　黒褐色土　10YR3/1　ローム・ブロック・粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。
29　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム・ブロック・粒子微盤含む。ローム土良く混じる。粘性・締まり共にあり。
30　明黄褐色土　10YR6/8　ローム主体。粘性強く、しまりあり。
31　黒褐色土　10YR3/1　ローム・ブロック・粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。
32　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒子多盤、ローム・ブロック少盤含む。粘性・締まり共にあり。
33　黒色土　10YR2/1　白色粒子・ローム粒子少盤、ローム・ブロック微盤含む。基質はやや粗粒。粘性・締まり共にあり。
34　黒褐色土　10YR2/2　ローム・ブロック・粒子少盤含む。粘性・締まり共にあり。

第７図　1～4号住居址断面図②

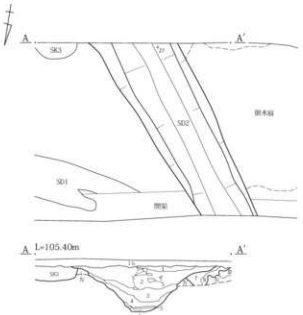


0　1：100　4m

SD1・3・4南壁セクション

1	暗褐色土	10YR3/3	As-B中量、As-A少量、ローム粒子・礫（～φ3cm）微量含む。粘性・締まり共にあり。
2	暗褐色土	10YR3/3	As-B・ローム粒子小量含む。墳丘起源の円礫・偏平礫がまとまってレンズ状に堆積。基質は粗粒。粘性・締まり共にあり。
3	黒褐色土	10YR3/2	As-B・ローム粒子・円礫（～φ10cm）少量含む。基質は粗粒。3層と同じ。粘性・締まり共にあり。
4	黒褐色土	10YR3/2	As-B・ローム粒子・円礫（～φ10cm）少量含む。基質は粗粒。粘性・締まり共にあり。
5	灰黄褐色土	10YR4/2	As-B・ロームブロック・粒子少量含む。基質は粗粒。粘性・締まり共にあり。
6	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ロームブロック・粒子多量、As-B少量含む。基質は粗粒。粘性・締まり共にあり。
7	灰黄褐色土	10YR4/2	ロームブロック・粒子中量、As-B少量含む。基質は粗粒。粘性・締まり共にあり。
8	暗褐色土	10YR3/4	ロームブロック・粒子中量、As-B少量含む。粘性・締まり共にあり。
9	暗褐色土	10YR3/4	As-B・ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。粘性・締まり共にあり。
10	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ロームブロック・粒子少量含む。粘性・締まり共にあり。
11	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ロームブロック・粒子少量含む。粘性・締まり共にあり。
12	にぶい黄褐色土	10YR4/3	As-B・ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。粘性・締まり共にあり。

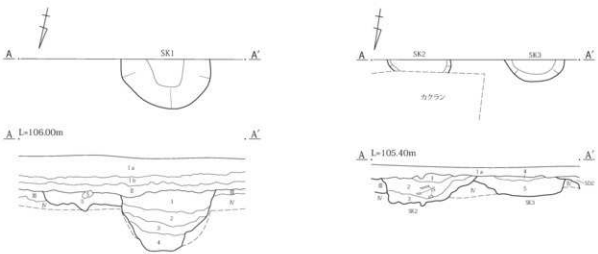
第8図　1・3・4号溝状遺構平面図及び断面図



SD2南壁セクション

1	黒褐色土	10YR3/2	As-A・As-B少量、焼土粒微量含む。粘性・締まり共にあり。
2	黒褐色土	10YR3/2	As-B・ローム ブロック・粒子少量含む。墳丘起源の片岩偏平礫・角礫混入目立つ。粘性・締まり共にあり。
3	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒子多量、ローム ブロック少量含む。粘性・締まり共にあり。
4	に ぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒子極めて多量、ローム ブロック少量含む。粘性・締まり共にあり。
5	灰黄褐色土	10YR5/2	シルト質。流水または湧水に伴う遺構物。ノロ・泥の塊。常時湧水した形跡なし。粘性強く、締まり軟らかい。
6	黒褐色土	10YR2/3	ローム ブロック多量、ローム粒子少量含む。粘性・締まり共にあり。
7	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒子多量含む。粘性・締まり共にあり。倒木痕。
8	に ぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム ブロック・粒子多量含む。粘性・締まり共にあり。倒木痕

第９図　2号溝状遺構平面図及び断面図



SK1南壁セクション

1	黒褐色土	10YR3/1	As-B類似の軽石少量、ローム ブロック・粒子微量含む。基質はやや粗粒。粘性・締まり共にあり。
2	黒褐色土	10YR3/1	ローム ブロック・粒子少量、白色粒子・焼土粒・炭化物微量含む。粘性・締まり共にあり。
3	黒褐色土	10YR3/1	ローム ブロック・粒子少量、白色粒子・焼土粒・炭化物微量含む。粘性・締まり共にあり。
4	黒褐色土	10YR3/2	ローム ブロック・粒子中量、白色粒子微量含む。粘性・締まり共にあり。相対的に締まる。
5	黒褐色土	10YR3/2	白色粒子・ローム ブロック・粒子少量含む。As-B の混入は良くわからない。粘性・締まり共にあり。

SK2・3南壁セクション

1	黒褐色土	10YR3/2	As-B少量、ローム粒微量含む。粘性・締まり共にあり。
2	黒褐色土	10YR3/2	As-B・ローム ブロック・粒子少量含む。墳丘起源の片岩偏平礫混じる。粘性・締まり共にあり。
3	に ぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム ブロック・粒子多量含む。粘性・締まり共にあり。
4	黒褐色土	10YR3/2	As-A・As-B少量、ローム粒子・焼土粒微量含む。粘性・締まり共にあり。
5	褐色土	10YR4/4	ローム ブロック・粒子多量、As-B少量含む。粘性・締まり共にあり。

0　1:60　2m

第10図　1～3号土坑平面図及び断面図

埋没は自然堆積の様相を呈する。As－A混土。流水の痕跡は見受けられない。91号墳と重複しこれを切る。覆土中から染付など陶磁器片、羽口片などが出土している。

SD3（第8図）

主軸方位はN－86°－W、ほぼ東西方向に直線的な走向をとり、区域内で途切れている。長さ約90cm、幅約25cm、深さは確認面から約3cmを測る。断面形皿状を呈する。底面はほぼ平坦で顕著な傾斜は窺われない。Ⅰa層に被覆され、掘り込みはⅣ層に達する。埋没は自然堆積の様相を呈する。As－A混土。流水の痕跡は見受けられない。遺構からの遺物の出土は確認されなかった。

SD4（第8図）

主軸方位はN－89°－W、ほぼ東西方向に直線的な走向をとり、区域内で途切れている。長さ約2m60cm、幅約70cm、深さは確認面から約1～5cmを測る。セクションの観察と掘方の形状から、本来は断面皿状の溝が2条切りあったものであると判断される。底面はほぼ平坦で顕著な傾斜は窺われない。Ⅰa層に被覆され、掘り込みはⅣ層に達する。埋没は自然堆積の様相を呈する。流水の痕跡は窺われない。As－A混土。遺構からの遺物の出土は認められなかった。

SD2（第9図）

主軸方位はN－30°－W、直線的な走向をとる。長さ約4m8cm、幅約1m48cm、深さは確認面から約60cmを測る。底面の標高は最高点で104m8cm、最低点で104m2cm、南東から北西にむかってわずかに傾斜している。断面形状は逆台形状を呈し、しっかりと掘り込まれ堀状。Ⅰa層に被覆され、Ⅲ層から掘り込まれる。埋没は自然堆積の様相を呈する。As－B混土。5層はシルト質で水成堆積と判断されるが、滞水時に堆積したような印象で常時通水した形跡は見られない。91号墳、SK3と重複し、新旧関係は一番新しい。また、覆土2層と3層の境界付近から内耳鍋の破片1点が出土している。出土遺物や層序から遺構の帰属年代は中世後期に比定される。

d. 土坑

SK1（第10図）

調査区南壁際に1/2程度を検出した。直径約1m38cm、深さは遺構確認面から約63cmを測る。平面形はやや不整の円形、断面形は半円形。埋没は自然堆積。Ⅱ層に被覆され、Ⅲ層から掘り込まれる。遺構の帰属年代は不明だが、覆土1層に少量のAs－Bの混入が見られることから概ね中世に比定される。覆土1層より縄文深鉢口縁部（前期）の破片が出土。なお、セクション上では東側に1基土坑の重複が確認できるが（5層）、掘り込みが遺構確認面に達せず消失しているため詳細不明である。

SK2（第10図）

調査区南壁際に検出した。長軸約96cm、短軸約21cm、深さは遺構確認面から約7cmを測る。平面形は北側をカクランによって大きく壊されているため不詳、断面形は逆台形状を呈する。SK3と重複し、新旧関係はSK3より新しい。Ⅰa層に被覆され、Ⅲ層から掘り込まれる。埋没は自然堆積。As－A混土。出土遺物は確認できなかった。

SK3（第 10 図）

調査区南壁際に 1/2 程度を検出した。長軸約 93cm、短軸約 33cm、深さは遺構確認面から約 5cmを測る。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。断面形は、底面が皿状に凹み、東壁は緩やかに、西壁は急激に立ち上がる。SD2・SK2 と重複し、新旧関係はこれらに切られる。覆土はロームブロックの混入が目立ち、人為的埋戻しの可能性がある。出土遺物なく遺構の帰属年代は不詳だが、層序関係から概ね中世～近世に比定される。

（櫻井和哉）

第２節　出土遺物

１号住居址（第 11 図・図版７）

本遺構からは弥生土器片 41 点、土師器片 222 点、埴輪片 15 点、剥片１点が出土し、そのうち土師器 11 点、弥生土器 13 点、円筒埴輪８点を図示し得た。本遺構に伴う土師器は第 11 図に掲載し、弥生土器と円筒埴輪は本遺構に伴うものではないと判断したため遺構外出土遺物として第 12・13 図に掲載した。

第 11 図１～５は坏、６～７は甕である。第 11 図７の甕底部の形状及び坏の形態などから、５世紀第４四半期～６世紀第１四半期にかけてのものと思われる。

２号住居址（第 11 図・図版７）

本遺構からは弥生土器片７点が出土し、そのうち３点を第 11 図に図示した。第 11 図９の沈線による文様や、８の底部の特徴から弥生時代前期～中期のものと思われる。

３号住居址（第 11 図・図版７）

本遺構からは弥生土器片４点が出土し、そのうち３点を第 11 図に図示した。すべて小破片のため時期を特定することは困難であるが、遺物の様相から２号住居址とほぼ同時期と考えられる。

SK1（第 12 図・図版８）

本遺構からは縄文土器片１点が出土し図示したが、本遺構に伴うものではないため遺構外出土遺物として第 12 図に図示した。

91 号墳（第 11 図・図版７）

本遺構からは縄文土器片２点、弥生土器片２点、土師器片 23 点、埴輪片 13 点が出土し、そのうち縄文土器２点、弥生土器１点、土師器５点、円筒埴輪１点を図示し得た。本遺構に伴うと考えられる円筒埴輪１点は第 11 図に掲載し、そのほかの縄文土器、弥生土器、土師器は本遺構に伴うものではないと判断したため遺構外出土遺物として第 12・13 図に掲載した。

第 11 図 14 は円筒埴輪の体部破片である。突帯が見られるがその他の特徴に乏しく、時期の特定は困難である。

SD1（第 11 図・図版７）

本遺構からは縄文土器片２点、土師器片５点、埴輪片 11 点、近世陶磁器片 48 点、鉄砲玉１点、時期不明の金属製品１点・羽口１点が出土した。そのうち近世陶磁器 10 点、鉄砲玉１点、羽口１点を第 11 図に図示した。

第 11 図 15・16・20・21 は陶器の鉢で、15・20・21 は口縁部、16 は高台部である。胎土・釉薬から瀬戸焼と思われる。17 は土師質土器のかわらけで、底部に回転糸切痕が見られる。18・19 は焼締め陶器のすり鉢である。擂り目は 10 条１単位で、体下部は磨滅が著しく使い込まれたものと思われる。24 は青磁片である。破片が小さいため器種は判別できない。22・23 は染付で、22 が碗、23 が蕎麦猪口である。いずれも小破片であるため時期の特定は困難であるが、18 世紀代のものと思われる。

SD2（第 11 図・図版７）

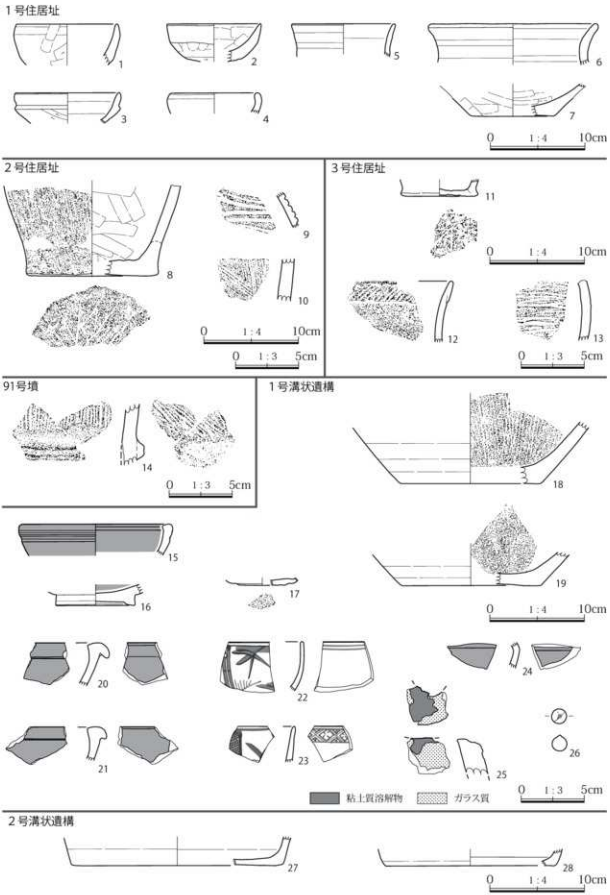
本遺構からは埴輪片７点、近世陶磁器片 13 点が出土し、そのうち近世陶磁器２点を第 11 図に図示した。第 11 図 27・28 はいずれも土師質土器の内耳鍋の底部である。27 の形態から 15 世紀後半～ 16 世紀初頭のものと考えられる。

遺構外（第 12・13 図・図版８）

遺構外からは弥生土器片１点、須恵器片１点、埴輪片 16 点、近世陶磁器片 17 点、時期不明金属製品１点、近代遺物２点が出土し、そのうち須恵器１点、形象・円筒埴輪９点、近世陶磁器６点を第12・13 図に図示した。また、遺構から出土したが遺構に伴わないと判断した遺物もここに掲載した。

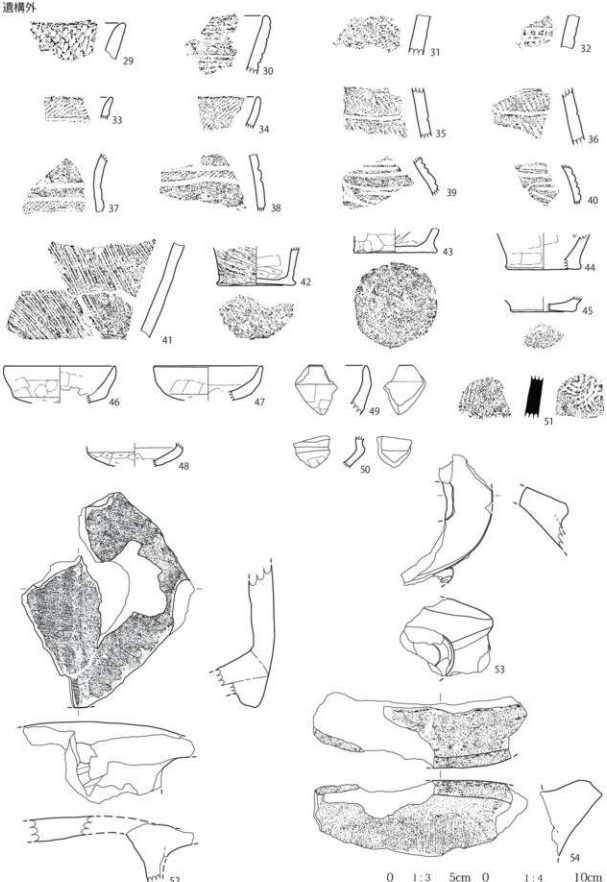
第 12 図 29 は SK1 から、30 は１号住居址から、31・32 は 91 号墳から出土した縄文土器である。29 は胎土に繊維が含まれていること及び施文の特徴から、縄文時代前期の黒浜式土器と思われる。32 は半截竹管による爪形文が施されていることから、縄文時代前期の諸磯式と思われる。33 ～ 44 は１号住居址から出土した弥生土器で、すべては甕である。これらは１号住居址と重複する２号・３号住居址に伴う遺物と考えられる。沈線区画内の縄文施文や沈線による文様などの特徴から、弥生時代前期～中期にかけてのものと考えられる。45 は 91 号墳から出土した弥生土器である。底部片で時期の判断は難しいが、２号・３号住居址と同時期のものと思われる。46 ～ 50 は 91 号墳から出土した土師器である。46・47 は１号住居址出土のものと類似していることから、同時期の５世紀第４四半期～６世紀第１四半期のものと思われる。51 は遺構外から出土した須恵器甕である。小破片のため時期は不明である。52・53 は遺構外から出土した形象埴輪であるが、遺存部位が少ないため形態は判別できない。第 13 図 58・60 ～ 66 は１号住居址から出土した円筒埴輪、第 13 図 56 は SD2 から出土した円筒埴輪、第 12 図 54・第 13 図 55・57・59・67 は遺構外から出土した円筒埴輪である。第 13 図 68 ～ 73 は遺構外から出土した近世陶磁器である。68・69 は染付で、68 は碗の口縁部、69 は碗または皿の底部である。70 は土師質土器で、鉢または壺の底部である。底部外縁に粘土紐を貼付け上げ底となっている。71 は陶器で天目茶碗である。72・73 は焼締め陶器ですり鉢である。備前焼か。いずれも 16 ～ 17 世紀代のものと思われる。

（髙林真人）

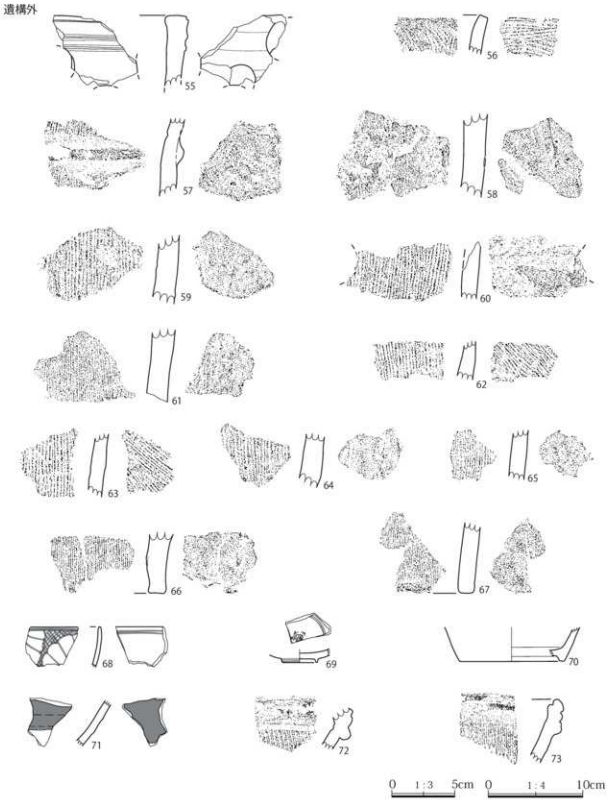


第11図　1～3号住居址、91号墳、1・2号溝状遺構出土遺物実測図

遺構外



第12図　遺構外出土遺物実測図①



第 13図　遺構外出土遺物実測図②

第１表　出土土器観察表

（ ）推定値　［ ］：残存値

挿図番号	写真図版	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
11 図 01	—	土師器 坏	1 号住居址 覆土	(10.8)	—	[4.3]	やや密	良	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ後一部縦位ヘラナデ。体上部一部縦位ヘラナデ。体下部斜位ヘラケズリ。 内面：口縁部～体部ナデ。	口縁部～体上部 1/8
11 図 02	7	土師器 坏	1 号住居址 覆土	(10.0)	—	[4.0]	密	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ。体上部横位ヘラナデ・指頭圧痕。体下部横位ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部横位・斜位ヘラナデ。	口縁部～体下部 1/8
11 図 03	7	土師器 坏	1 号住居址 覆土	(11.0)	—	[3.2]	密	良好	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ。体部斜位ヘラケズリ。 内面：口縁部～体部ヨコナデ。	口縁部～体上部 1/8
11 図 04	7	土師器 坏	1 号住居址 覆土	(9.4)	—	[2.1]	やや密	良	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ。体上部ヘラナデか。 内面：口縁部～体上部ナデ。	口縁部～体上部 1/8
11 図 05	7	土師器 坏	1 号住居址 覆土	(11.0)	—	[3.2]	密	良好	にぶい褐色	外内面：口縁端部ナデ。口縁部ヨコナデ。	口縁部 1/5
11 図 06	7	土師器 甕	1 号住居址 覆土	(17.8)	—	[4.3]	密	良	橙色	外面：口縁端部ナデ。口縁部～頸部ヨコナデ。 内面：口縁部～頸部ヨコナデ。	口縁部～頸部 1/5
11 図 07	7	土師器 甕	1 号住居址 覆土	—	(8.6)	[3.4]	やや粗	良	褐灰色	外面：胴下部ナデ・横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。 内面：胴下部～底部横位ヘラナデ。	胴下部～底部 1/5
11 図 08	7	弥生土器 甕	2 号住居址 覆土	—	(14.0)	[9.5]	粗	良	黄橙色	外面：胴下部斜位ハケメ。底部本葉痕。 内面：胴下部斜位・横位ヘラナデ。底部横位ヘラケズリ。	胴下部～底部 1/3
11 図 09	7	弥生土器 壺	2 号住居址 覆土	—	—	[2.8]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：変形工字文。 内面：横位ヘラナデ。	胴部 破片
11 図 10	—	弥生土器 甕	2 号住居址 覆土	—	—	[3.3]	やや粗	良	にぶい橙色	外面：櫛歯状ハケメ。 内面：ヘラナデ・ナデ。	胴部 破片
11 図 11	7	弥生土器 甕	3 号住居址 覆土	—	(8.0)	[1.8]	やや密	良	橙色	外面：胴下部横位ヘラナデ。底部本葉痕。 内面：胴下部ヘラナデか。底部ヘラナデ。	底部 破片
11 図 12	—	弥生土器 甕	3 号住居址 覆土	—	—	[4.8]	密	やや不良	橙色	外面：口縁部 LR 単節縄文、頸部磨滅激しく調整不明。ヘラナデか。 内面：口縁部～頸部横位ヘラナデ。	口縁部 破片
11 図 13	7	弥生土器 甕	3 号住居址 覆土	—	—	[4.7]	密	良好	明赤褐色	外面：横位ハケメ。 内面：横位・斜位ヘラナデ。	胴部 破片
11 図 15	7	陶器 鉢	SD 1 覆土	(16.0)	—	[3.3]	密	良好	オリーブ色	外面：口縁部に２条の沈線。ロクロナデ 内面：口縁端部が玉縁状を呈する。ロクロナデ。外内面ともにオリーブ色釉を施す。	口縁部 破片
11 図 16	7	陶器 鉢	SD 1 覆土	—	(8.2)	[2.2]	密	良好	オリーブ色	外面：回転ヘラケズリ。高台部は削り出し。 内面：ロクロナデ。オリーブ色釉施釉。	体下部～高台部 破片
11 図 17	7	土師質土器 かわらけ	SD 1 覆土	—	(5.0)	[0.8]	密	良	にぶい褐色	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面：ロクロナデ。	底部 破片
11 図 18	7	焼締の陶器 すり鉢	SD 1 覆土	—	(14.8)	[6.5]	やや密	良好	にぶい赤褐色	外面：ロクロナデ。 内面：10 条 1 単位の擂目。	胴下部～底部 1/5
11 図 19	7	焼締の陶器 すり鉢	SD 1 覆土	—	(14.6)	[3.4]	やや密	良好	橙色	外面：ロクロナデ。 内面：6 条以上 1 単位の擂目。	胴下部～底部 破片
11 図 20	7	陶器 鉢	SD 1 覆土	—	—	[3.3]	密	良好	灰黄色	口縁部外面に粘土紐を貼付け玉縁状を呈する。外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。口縁端部に鋭角な稜線を持つ。外内面ともに灰黄色釉施釉。	口縁部 破片
11 図 21	—	陶器 鉢	SD 1 覆土	—	—	[3.0]	密	良好	浅黄色	口縁部外面は玉縁状を呈する。外内面：ロクロナデ。	口縁部 破片
11 図 22	7	染付 碗	SD 1 覆土	—	—	[4.0]	密	良好	—	外面：口縁部二重圏線、体部無文。 内面：口縁部～体部圏線の下に草木文。	口縁部～体部 1/5
11 図 23	7	染付 蕎麦猪口	SD 1 覆土	—	—	[2.8]	密	良好	—	外面：口縁部圏線、体部区画内を斜格子文で充填、草木文か。 内面：口縁部四方襷文、体部無文。	口縁部～体上部 破片
11 図 24	7	青磁 不明	SD 1 覆土	—	—	[2.0]	密	良好	明緑灰色	外面：ロクロナデ。明緑灰色釉施釉。 内面：ロクロナデ。明オリーブ灰色釉施釉。	体部 破片
11 図 27	7	土師質土器 焙烙（鍋）	SD 2 覆土	—	(22.4)	[3.0]	密	良好	灰褐色	外面：胴下部ロクロナデ。底部外縁ヘラナデ。底部ナデ。 内面：胴下部ロクロナデ。底部ヘラナデ。	胴下部～底部 1/5
11 図 28	—	土師質土器 焙烙（鍋）	SD 2 覆土	—	(18.0)	[1.8]	密	良	褐灰色	外面：胴下部ロクロナデ。底部ヘラナデ。 内面：胴下部～底部ヘラナデ。	胴下部～底部 破片
12 図 29	8	縄文土器 深鉢	SK 1 覆土	—	—	[2.9]	粗	良	橙色	外面：RL 単節縄文。 内面：ナデ。	口縁部 破片
12 図 30	—	縄文土器か 深鉢か	1 号住居址 覆土	—	—	[4.7]	やや粗	良好	褐色	外面：横位の沈線と棒状工具刺突文を交互に施文。 内面：ナデ。	口縁部 破片
12 図 31	8	縄文土器 深鉢	91 号遺西側 覆土	—	—	[3.0]	密	良好	橙色	外面：絡条体圧痕文。 内面：ナデ。	胴部 破片
12 図 32	8	縄文土器 深鉢	91 号遺東側 覆土	—	—	[2.7]	密	良好	明黄褐色	外面：1 条の横位沈線の下に平截竹管文を２段施文。 内面：ナデ。	胴部 破片

掲図番号	写真図版	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
12図33	—	弥生土器 甕	1号住居址 掘方	—	—	[1.7]	密	良好	赤褐色	外面：LR単節縄文の下に横位沈線を施文。 内面：ナデ。	口縁部 破片
12図34	—	弥生土器 甕	1号住居址 掘方	—	—	[2.5]	やや粗	良	橙色	外面：LR単節縄文。 内面：ナデ。	口縁部 破片
12図35	8	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	—	[3.9]	密	良好	にぶい橙色	外面：横位沈線の上下にRL単節縄文を施文。 内面：ヘラナデ・ナデ。 36と同一個体か。	胴部 破片
12図36	—	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	—	[4.5]	密	良好	にぶい橙色	外面：横位沈線の上下にRL単節縄文を施文。 内面：ヘラナデ・ナデ。 35と同一個体か。	胴部 破片
12図37	8	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	—	[4.6]	密	良好	橙色	外面：上位は3条の横位沈線文で沈線間の上部はLR単節縄文，下側はナデ。下位は縦位ヘラケズリ。 内面：横位・斜位ヘラケズリ。	胴部 破片
12図38	8	弥生土器 甕	1号住居址 掘方	—	—	[4.6]	密	良好	明赤褐色	外面：上位ナデ、中位2条の沈線文間にRL単節縄文を施文、下位斜位ヘラケズリ。 内面：横位・斜位ヘラケズリ。	胴部 破片
12図39	8	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	—	[3.1]	密	良好	灰黄褐色	外面：変形工字文。 内面：横位ヘラナデ・ナデ。	胴部 破片
12図40	—	弥生土器 甕	1号住居址 掘方	—	—	[3.1]	密	良好	にぶい橙色	外面：変形工字文。 内面：横位ヘラナデ・ナデ。	胴部 破片
12図41	—	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	—	[7.6]	やや粗	良	橙色	外面：斜位ハケメ。 内面：斜位ヘラナデ。	胴部 破片
12図42	8	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	(8.4)	[4.0]	やや密	良	明黄褐色	外面：胴下部斜位ハケメ，底部外縁ナデ、底部縦代痕。 内面：胴下部横位ヘラナデ、底部外縁横位ヘラケズリ。	胴下部～底部 1/2
12図43	8	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	8.8	[2.5]	密	良好	明赤褐色	外面：胴下部横位ヘラナデ・指頭圧痕、底部外縁ナデ、底部縦代痕。内面：胴下部～底部横位ヘラナデ・角を用いた斜位ヘラケズリ。	胴下部～底部 完存
12図44	—	弥生土器 甕	1号住居址 覆土	—	(7.4)	[3.7]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：胴下部ナデ・横位ヘラナデ、底部ナデ。 内面：胴下部ナデ・横位ヘラナデ。	胴下部～底部 1/8
12図45	—	弥生土器 甕	91号墳西側 覆土	—	(7.0)	[1.6]	密	良	にぶい橙色	外面：胴下部横位ヘラナデ、底部木葉痕。 内面：胴下部～底部横位ヘラナデ。	胴下部～底部 1/5
12図46	8	土師器 坏	91号墳西側 覆土	(11.8)	—	[3.9]	やや密	良好	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体下部横位ヘラケズリ・指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ、体部横位ヘラケズリ・ナデ。	口縁部～体下部 1/8
12図47	8	土師器 坏	91号墳西側 覆土	(11.4)	—	[3.6]	やや密	良好	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体下部横位ヘラナデ、体下部横位・斜位ヘラケズリ。 内面：口縁部～体上部ヨコナデ、体下部斜位ヘラナデ。	口縁部～体下部 1/8
12図48	—	土師器 高坏	91号墳西側 覆土	—	—	[2.5]	密	良好	にぶい褐色	外面：体上部ヨコナデ、体下部斜位ヘラケズリ。 内面：体上部ヨコナデ、体下部横位・斜位ヘラケズリ。	体部 1/4
12図49	—	土師器 坏	91号墳西側 覆土	—	—	[3.9]	やや密	良好	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部横位ヘラナデ、ヘラケズリか。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	口縁部 破片
12図50	—	土師器 坏	91号墳西側 覆土	—	—	[2.8]	密	良	橙色	外面：体上部ヨコナデ、体下部ナデ・斜位ヘラケズリ。 内面：体部ヨコナデ。	体部 破片
12図51	8	須恵器 甕	表採	—	—	[3.2]	密	還元焔焼成	灰色	外面：斜位平行タタキメ後ナデ。 内面：同心円当て具痕。	胴部 破片
13図68	8	染付 碗	遺構外	—	—	[3.1]	密	良好	—	外面：口縁部圏線、体部菊花文を描きすき間に斜格子文を充填。 内面：口縁部二重圏線、体部無文。	口縁部～体上部 1/5
13図69	8	染付 碗又は皿か	遺構外	—	(3.7)	[1.4]	密	良好	—	外面：体下部一重圏線、高台部二重圏線。 内面：見込み外縁部二重圏線、見込み崩れた井花文か。	体下部～高台部 1/4
13図70	8	土師質土器 鉢又は壺か	遺構外	—	(11.0)	[3.6]	密	良好	にぶい赤褐色	外面：胴下部ナデ・ヘラナデ、底部回転ヘラケズリ。底部は外縁部を削り出し上げ底を呈する。 内面：胴下部ロクロナデ、底部ナデ。	胴下部～高台部 1/5
13図71	8	陶器 天目茶碗	遺構外	—	—	[3.9]	密	良好	黒褐色	外内面：ロクロナデ。鉄釉施釉。	体下部 破片
13図72	—	焼締め陶器 すり鉢	遺構外	—	—	[3.3]	密	良好	明赤褐色	外面：口縁部2条の凹線、胴部ロクロナデ。 内面：口縁部ロクロナデ、胴部単位不明の擂り目。	口縁部 破片
13図73	8	焼締め陶器 すり鉢	遺構外	—	—	[5.0]	やや密	良好	にぶい褐色	外面：口縁部2条の凹線、胴部回転ヘラケズリ。 内面：口縁部1条の凹線、胴部10条1単位の擂り目。	口縁部 破片

第２表　出土埴輪観察表

挿図番号	写真図版	器種	出土位置	A：法量単位cm（）は推定　B：成形　C：整形・調整　D：胎土・材質　E：色調　F：遺存度　G：備考
11 図 14	7	円筒埴輪	91 号墳東側 周土	A：遺存高 4.8　B：粘土紐積み上げ、突帯貼付　C：外面縦ハケ、突帯横ナデ　内面斜ハケ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：胴部破片
12 図 52	8	形象埴輪	遺構外	A：遺存高 6.6　B：粘土紐積み上げ、頂部粘土板貼付、上部粘土紐貼付　C：外面頂部縦ハケ、胴上部横ナデ　内面頂部ナデ、胴上部ヘラナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：頂部 1/3　G：形象埴輪と思われるが、器種は不明。
12 図 53	8	形象埴輪	遺構外	A：遺存高 6.2　B：粘土紐積み上げ、頂部粘土板貼付け・透孔穿孔、上部粘土紐貼付　C：外面頂部～胴上部ヘラナデ・ナデ　内面胴上部ヘラナデ・ナデ　D：砂粒、雲母片　E：外面橙色　内面明赤褐色　F：頂部～胴上部 1/4
12 図 54	—	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高 6.0　B：粘土紐積み上げ　C：外面口縁端部・口縁部横ナデ、胴部縦ハケ　内面口縁部横ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：口縁部破片　G：口縁部ではなく突帯か
12 図 55	8	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高 5.6　B：粘土紐積み上げ、凸線２条ナデ成形、透孔２段剛両状に穿孔　C：外面口縁端部横位ヘラナデ、口縁部～胴部横ナデ　内面口縁部～胴部横ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：口縁部破片
13 図 56	—	円筒埴輪	SD 2 周土	A：遺存高 3.1　B：粘土紐積み上げ　C：口縁端部ヘラナデ　外面斜・縦ハケ　内面横ハケ　D：砂粒　E：外内面明赤褐色　F：口縁部破片
13 図 57	8	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高 6.1　B：粘土紐積み上げ、突帯貼付　C：外面胴部縦ハケ、突帯部横ナデ　内面胴部ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：胴部破片
13 図 58	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 6.6　B：粘土紐積み上げ　C：外面表面の大半が調落、縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：胴部破片
13 図 59	—	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高 5.4　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：胴部破片
13 図 60	8	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 4.5　B：粘土紐積み上げ、透孔穿孔　C：外面縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒　E：外面にぶい橙色　内面橙色　F：胴部破片
13 図 61	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 5.8　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面縦ナデ　D：砂粒　E：外面橙色　内面明赤褐色　F：胴部破片
13 図 62	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 3.0　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面斜ハケ　D：砂粒　E：外内面にぶい橙色　F：胴部破片
13 図 63	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 4.9　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面斜ハケ　D：砂粒　E：外内面にぶい橙色　F：胴部破片
13 図 64	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 4.2　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒　E：外面橙色　内面にぶい黄橙色　F：胴部破片
13 図 65	—	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 3.9　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：胴部破片
13 図 66	8	円筒埴輪	1 号住居址 周土	A：遺存高 4.7　B：粘土紐積み上げ　C：外面縦ハケ　内面ナデ　D：砂粒、雲母片　E：外内面橙色　F：底部破片
13 図 67	8	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高 5.6　B：粘土紐積み上げ　C：外面胴部縦ハケ、底部ヘラナデ　内面胴部縦ナデ　D：砂粒　E：外内面橙色　F：口縁部破片

第３表　出土土製品・金属製品観察表

挿図番号	写真図版	器種	出土位置	A：法量単位cm（）は推定　B：成形　C：整形・調整　D：胎土・材質　E：色調　F：残存度　G：備考
11 図 25	7	羽口	SD 1 周土	A：遺存高 2.8、孔径（3.0）　B：棒状のものに巻き付けか　C：ナデか　D：やや密　E：灰黄褐色　F：先端部破片　G：炉側端部に粘土質溶解物付着、一部ガラス質化
11 図 26	7	鉄庭玉	SD 1 周土	A：直径 1.2　B：鋳造　D：鉛と思われる　E：白色（銀）　F：完形　G：二匂玉か

第Ⅵ章　総括

今回の調査では古墳址１基、竪穴住居址４棟、溝状遺構４条、土坑１基を検出した。以下雑駁ではあるが遺跡の内容について検出された主要な遺構を中心に概観し、まとめに代えたい。

検出された古墳址について　調査の結果、全長約 21 m の円墳であることが推定され、区域内では南端のブリッジを含む一部分を検出した形となっている。大半が区域外北側に広がり、墳丘北側の一部分のみが残存するものの、一帯は削平されており平坦な地形となっている。主体部は失われているが、検出したブリッジの軸方向から、概ね南南東に開口する横穴式石室を伴ったものと推定される。なお、調査区周辺では畑地の地境などに結晶片岩を主体とした多量の川原石の集積が目立つ。結晶片岩は、三波川変成帯を基盤とする上武山地から流下する小山川では一般的な岩石であり、本古墳址でも石室の用材として使われたものであると考えられる。試掘調査では形象埴輪が出土し、周溝覆土からも円筒埴輪の破片の出土もみられる。しかし少量で墳丘における樹立の状況は不明であり、また、葺石の有無についても窺い知ることはできない。年代の指標となる遺物の出土を欠くため詳細は不詳だが、近接する位置に検出した１号住居址の帰属年代から、古墳址は概ね６世紀前半以降の築造であると推測される。また SD1・SD2 は古墳址と重複するが周溝に制約されない走向をとっており、また SD1 では１層中には多量の結晶片岩の川原石が混ざることから、近世の段階で、ある程度墳丘の破壊が進行していた様子が窺われる。

検出された竪穴住居址について　４棟を検出したが、４号住居址は一応番号を付したが、確認面では消失し調査区壁面で遺構と判断できたもので形状・規模・機能の実際については不明である。また、2・3 号住居址も重複する１号住居址によって大きく壊されているため詳細不明である。全体的に出土遺物が少なく覆土中からの出土であり、残存不良でほとんどが破片で個体復元の可能なものがない。このため遺構の年代比定にはやや難があるが、１号住居址は、粗製で判定の難しい椀形の器種が伴うものの模倣坏が伴出し、甕口縁部破片、甕底部破片の形態から古墳時代後期、概ね６世紀前半に比定されると思われる。2・3 号住居址では弥生土器が出土し、また、他の時代の遺物の混入は認められないことから弥生時代前～中期の竪穴住居址の可能性もある。しかし、後述する理由からこれら遺構の年代比定については保留したい。なお、１号住居址は、古墳址との直接的な重複関係にはない。しかし、古墳址との並行、周辺における同時期の集落遺跡の傾向を踏まえれば、古墳の造営に伴って廃絶された集落の一端を構成する住居址であったと解釈される。

竪穴住居址覆土のテフラ分析について　今回の調査では遺構覆土の年代比定を目的として１号住居址及び２号住居址の覆土からサンプルを採取し、混入するテフラの同定を行った。当初、それぞれの遺構覆土に混入するテフラの種別・構成の相違から年代の類推が可能であると考えた。テフラ分析では、1・2 号住ともに As － B 及び Hr － FA 起源の火山ガラスが検出され、量的な差異はやや認められるが、混入するテフラの構成はほぼ同じであるという結果を得た。また、２号住居址の年代を弥生時代前～中期に想定していたが、Hr － FA の検出がありそこまで年代が遡らない可能性が示唆された（註１）。むしろ１号住居址と近しい年代とも考えられ、２号住居址を切る重複関係にある３号住も含めて、遺構が弥生時代に帰属する根拠が希薄なものとなってしまい検討の余地を残すものとなった。

溝跡について　４条を検出した。遺構の年代は出土遺物からともに近世に比定される。SD1・SD3・

SD4 については先述したが、近接する位置に繰り返し掘り直された溝が累積したものである。継起的に掘り直されるところに区画性の強さが看取されるとともに、その走向から例えば丘陵を横断する道路などの側溝であった可能性も想起される。SD2 は逆台形状、いわゆる箱薬研状のしっかりとした掘り込みを持つ溝跡であり、例えば屋敷地を囲繞する性格のものと考えられる。隣接地は塚原館跡の存在が知られており、これに関連する遺構であるかもしれない。

その他　調査区域内では、微量ながら遺構外より縄文土器の出土が認められた。第 12 図 29 は、胎土に繊維を含み、第 12 図 32 は諸磯ｂ式の深鉢片である。本庄市域では、前期集落は丘陵部に立地する傾向があるが本遺跡近隣ではでは秋山中山遺跡（秋山西部遺跡群）などでその分布を確認することができる。

弥生土器について　今回の調査では、2・3 号住居址を中心に少量ながら弥生時代の土器片も出土したが、ここではその特徴を簡単にまとめておきたい。出土した弥生土器は、個体復元の可能なものに恵まれず、出土状態も一括性に乏しい中、年代的には全体的に概ね若狭編年Ⅰ期 2 段階からⅡ期 3 段階の間に収まるものと思われる。確認できた器種は、識別しうる範囲では甕のみである。文様の確認できる破片には、3 号住図 12・遺構外図 33・34、2 号住図 9・遺構外図 39・40、遺構外図 35・36・37・38 がある。このうち 3 号住図 12・遺構外図 33・34 は甕口縁部破片であるが、いずれも端部に単節縄文を施した装飾帯を有し、相対的に新しい様相を示している。2 号住図 9・遺構外図 39・40、遺構外図 35・36・37・38 は甕胴部文様帯の破片である。2 号住図 9・遺構外図 39・40 は沈線による変形工字文が描かれ、やや古い様相を呈する。これらは地文に条痕を伴わず浅鉢などの可能性もあるが、器形的な特徴からここでは甕と認定した。遺構外図 35・36・37・38 は地文が単節縄文で横位の沈線が施され、新しい特徴を備えている。胴部下半の破片にはほとんどのものに条痕が施されるが、2 号住図 8・10 のように細密でハケ状のものと、3 号住図 13・遺構外図 42 のように粗いものの 2 種類が認められる。また、底部圧痕の観察される破片もあるが、木葉痕、網代痕の両方が確認される。（櫻井和哉）

（註 1）As－B は天仁元年（1108 年）の降灰であり、古墳時代の遺構に成層せずに混入するとなるとつじつまが合わない。しかし、1 号住居址は出土遺物・遺構の構造から帰属年代を古墳時代後期とすることは妥当であると判断されるため、As-B の混入は、植生などによる土壌のカクランによるものと解釈したい。

参考文献

浅間　陽　2010　『児玉大天白遺跡』 本庄市遺跡調査会
荒巻実ほか1986　『C11 沖Ⅱ遺跡』 群馬県藤岡市教育委員会
恋河内昭彦1987　『秋山東遺跡』 児玉町秋山東遺跡調査会
恋河内昭彦2003　『大久保遺跡（B 地点の調査）』 児玉町遺跡調査会
櫻井和哉　2004　『児玉大久保遺跡－ C 地点の調査－』 児玉町遺跡調査会
鈴木徳雄　2007　『秋山諏訪平遺跡－ C 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会
鈴木徳雄　2007　『児玉清水遺跡－ A 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会
鈴木徳雄　2007　『児玉清水遺跡Ⅱ－ B 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会
高橋清文　2012　『秋山西部遺跡群』 本庄市遺跡調査会
鳥羽正之　2003　『四十坂遺跡』 岡部町遺跡調査会
日沖剛史　2007　『平遺跡発掘調査報告書－ A-E 地点の調査－』 神泉村遺跡調査会
宮本久子　2010　『秋山大町遺跡－ B・C・D・E 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会
宮本久子　2010　『秋山大町東遺跡　秋山諏訪平遺跡－ D・E・F 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会
若狭徹　1996　『群馬県地域』『YAY！（やいっ！）弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』 弥生土器を語る会
鈴木徳雄　2012　『秋山諏訪平遺跡Ⅳ－ G 地点の調査－』 本庄市遺跡調査会

付編：秋山古墳群のテフラ分析

藤根　久・鈴木正章（パレオ・ラボ）

1. はじめに

秋山古墳群の調査では、古墳時代住居址と弥生時代住居址が検出された。ここでは、各住居址の覆土について、鉱物組成と火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定を行い、覆土中に挟在するテフラについて検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、弥生時代前期終り～中期の住居址覆土（北壁）の５試料と、古墳時代中期以降の住居址覆土（南壁）の７試料の、合計 12 試料である（第４表）。

第４表　分析試料とその特徴

分析 No.	位置	遺構	堆積物の色調	１φ篩残渣の粒子の特徴
1	北壁	弥生時代住居址（前期終り～中期）の覆土	黒褐色（10YR 3/2）、土壌	片岩類（最大 6mm）、褐鉄鉱〉石英・長石類、輝石類、淡褐色軽石、黒色スコリア
2			黒褐色（10YR 2/2）、土壌	石英・長石類、輝石類、片岩類、褐鉄鉱、角閃石
3			黒色　（10YR 2/1）、土壌	片岩類（最大 11mm）、褐鉄鉱、石英・長石類、輝石類、淡褐色軽石
4			黒褐色（10YR 3/2）、土壌	片岩類（最大 5mm）、褐鉄鉱〉石英・長石類、輝石類、灰白色軽石
5			黒褐色（10YR 2/2）、土壌	片岩類（最大 5mm）、褐鉄鉱〉石英・長石類、輝石類、灰白色軽石
1	南壁	古墳時代住居址（中期以降）の覆土	黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐色軽石（最大 3mm）〉黒色スコリア、片岩類（最大 3mm）、石英・長石類、輝石類
2			黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐色軽石（最大 4mm）〉黒色・赤色スコリア、片岩類（最大 3mm）、石英・長石類、輝石類
3			黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐・灰色軽石（最大 2.5mm）〉黒色スコリア、片岩類、石英・長石類、輝石類、褐鉄鉱（最大 3mm）
4			黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐色軽石（最大 4.5mm）〉黒色・赤色スコリア、片岩類、石英・長石類、輝石類
5			黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐色軽石（最大 4.5mm）〉黒色・赤色スコリア、片岩類、石英・長石類、輝石類
6			黒色（10YR 1.7/1）、土壌	淡褐色軽石（最大 2.5mm）〉黒色・赤色スコリア、片岩類、石英・長石類、輝石類
7			黒色（10YR 1.7/1）、土壌（淡褐色軽石が密集）	淡褐色軽石（最大 1.5mm）〉黒色・赤色スコリア、片岩類、石英・長石類（最大 5mm）、輝石類

各試料を、以下の方法で処理した。

湿潤重量 30g 程度を秤量した後、1 φ（0.5mm）、2 φ（0.25mm）、3 φ（0.125mm）、4 φ（0.063mm）の４枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。

４φ篩残渣について、重液（テトラブロモエタン、比重 2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従って、バブル型平板状（b1）、バブル型Ｙ字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破砕型フレーク状（c1）、急冷破砕型塊状（c2）に分類した。

重鉱物は、封入剤レークサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、カンラン石（Ol）、磁鉄鉱（Mg）等を同定・計数した。

火山ガラスを多く含む試料の４φ軽鉱物中の火山ガラスについては、横山ほか（1986）に従い、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

3. 結果

以下に、試料中の粒子の特徴、鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定、の各結果について述べる。

［弥生時代住居址の覆土（北壁、分析 No.1 ～ No.5）］

堆積物は、黒色～黒褐色の土壌からなる。1 φ篩残渣中には、片岩類(最大 11mm)や褐鉄鉱が目立ち、石英・長石類、輝石類、淡褐色～灰白色の軽石が含まれていた（第 4 表）。

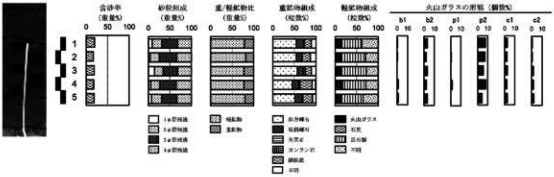
粒度組成は、3 φ ～ 4 φ篩残渣が多い。重液分離では、いずれも軽鉱物の割合が高い（第 5 表）。軽鉱物中の火山ガラスは、300 粒計数して 39 ～ 49 粒が含まれ、分析 No.4 において極大を示す（第 6 表）。火山ガラスは、軽石型スポンジ状ガラス（p2）が特徴的で、バブル型平板状ガラス（b1）やバブル型 Y 字状ガラス（b2）、急冷破砕型フレーク状ガラス(c1)、急冷破砕型塊状ガラス(c2)

第 5 表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

分析 No.	採取位置	処理前重 (g)	砂粒分の湿度組成（重量 g）				軽・重鉱物組成（重量 g）	
			1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	軽鉱物	重鉱物
1	弥生時代 住居址壁土（北壁）	32.17	0.58	1.40	2.31	2.02	0.33	0.09
2		32.97	0.21	1.19	2.22	1.91	0.39	0.09
3		33.77	0.88	1.26	2.10	2.00	0.24	0.07
4		30.75	0.28	1.17	2.04	1.91	0.21	0.06
5		30.36	0.41	1.27	2.00	1.89	0.32	0.08
1	古墳時代 住居址壁土（南壁）	33.64	0.73	3.14	2.87	2.55	0.34	0.08
2		32.78	0.77	3.11	2.81	2.42	0.25	0.06
3		34.79	0.93	3.74	3.07	2.59	0.41	0.09
4		33.55	1.06	3.75	2.95	2.63	0.33	0.08
3		35.00	1.11	3.61	2.86	2.52	0.28	0.04
6		33.12	0.83	3.27	2.71	2.39	0.27	0.08
7		32.76	0.73	2.73	2.39	1.93	0.16	0.04

第 6 表　4 φ篩残渣中の鉱物組成

分析群	採取位置	石英 (Qz)	長石 (Pl)	不明 (Opq)	火山ガラス バブル（凸）型 平板状 (b1)	バブル（凸）型 Y 字状 (b2)	軽石型 繊維状 (p1)	軽石型 スポンジ状 (p2)	急冷破砕型 フレーク状 (c1)	急冷破砕型 塊状 (c2)	ガラス合計	軽鉱物合計	重鉱物 斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	カンラン石 (Ol)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opq)	重鉱物の合計
1	弥生時代 住居址壁土（北壁）	4	137	115	1	10		23	8	2	44	300	163	51	7		48	31	300
2		8	164	89	1	6	1	22	7	2	39	300	163	38	3		58	38	300
3		5	172	83		10		17	8	5	40	300	171	43	13		42	31	300
4		2	162	87	3	7	4	24	6	5	49	300	136	43	10	2	84	25	300
5		3	149	106	3	10		13	8	6	40	300	153	51	5		67	24	300
1	古墳時代 住居址壁土（南壁）	3	84	131		9	1	68	7	2	82	300	178	59	4		37	22	300
2		4	101	110		7		71	6	4	88	300	199	54	6	1	21	19	300
3		1	99	145		3	1	43	2	6	55	300	204	47	2		26	21	300
4		1	101	124		3		63	3	6	75	300	201	48	3		17	31	300
5		2	101	142		4		54	2	4	61	300	196	58	5		20	21	300
6		3	107	128		5	4	50	1	2	62	300	192	41	4		37	26	300
7		1	108	145		5		38	2	1	46	300	187	53	1		35	24	300



第 14 図　弥生時代住居址の覆土（北壁）のテフラ分析結果

などを含む。重鉱物は、斜方輝石（Opx）が多く、次いで単斜輝石（Cpx）が多く、角閃石（Ho）を少量含む。なお、分析 No.3 と No.4 では角閃石がやや多い（第 6 表、第 14 図）。

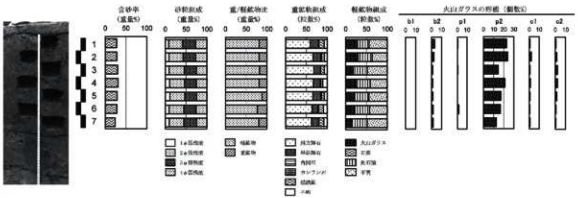
分析 No.4 の火山ガラスの屈折率測定では、低い範囲 1.500-1.504 と高い範囲 1.528-1.532 の火山ガラスを含む（第 16 図）。

［古墳時代住居址の覆土（南壁、分析 No.1 ～ No.7）］

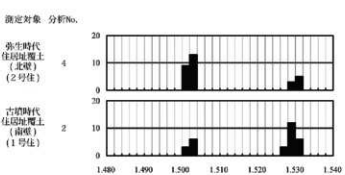
堆積物は、黒色の土壌からなり、最下部の分析 No.7 に相当する層位には淡褐色の軽石が密集する。1 φ篩残渣中には、最大 4.5mm の淡褐色軽石を特徴的に多く含み、黒色・赤色スコリア、片岩類、石英・

長石類（最大 5mm）、輝石類も含む。（第 4 表、第 17 図 -1,2）。

粒度組成は、2 ～ 4 φ篩残渣が多い。重液分離では、いずれも軽鉱物の割合が高い（第 5 表）。軽鉱物で中の火山ガラスは、300 粒計数して 46 ～ 88 粒が含まれ、分析 No.2 において極大を示す（第 6 表）。火山ガラスは、軽石型スポンジ状ガラス（p2）が特徴的で、バブル型Y字状ガラス（b2）や急冷破砕型フレーク状ガラス（c1）、急冷破砕型塊状ガラス（c2）などを含む。重鉱物では、斜方輝石（Opx）が多く、次いで単斜輝石（Cpx）が多く、角閃石（Ho）を少量含む（第 6 表、第 15 図）。分析 No.2 の火山ガラスの屈折率測定では、低い範囲 1.500-1.504 と高い範囲 1.526-1.532 の火山ガラスを含む（第 16 図）。



第 15 図　古墳時代住居址の覆土（南壁）のテフラ分析結果



範囲(range)	平均 (mean)	個数
1.5007 - 1.5310	1.5095	30
1.5010 - 1.5312	1.5212	30

第 16 図　各覆土中の火山ガラスの屈折率測定結果

4. 考察

弥生時代住居址 (2 号住) の覆土（北壁、分析 No.1 ～ No.5）のテフラ分析では、軽石型火山ガラスなどが特徴的に含まれ、主に斜方輝石と単斜輝石からなる鉱物組成であった。分析 No.4 の火山ガラスの屈折率測定において低い範囲を示す火山ガラスが含まれており、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）を含んでいるとみられる。ただし、角閃石が少なく、両輝石の鉱物組成を示すため、浅間 B テフラ（As-B）起源の火山ガラスが多いと考えられる。

古墳時代住居址 (1 号住) の覆土（南壁、分析 No.1 ～ No.7）のテフラ分析では、軽石型火山ガラスなどが特徴的に含まれ、主に斜方輝石と単斜輝石からなる鉱物組成であった。1 φ篩残渣中に淡黄褐色軽石を含み、主に両輝石からなる鉱物組成で、高い屈折率範囲を示す火山ガラスが多いため、主に浅間 B テフラ (As-B) と考えられる。なお、分析 No.2 の火山ガラスは低い屈折率範囲を伴っており、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）起源の火山ガラスも含まれているとみられる。

なお、浅間 B テフラ（As-B）起源の比較的大きな淡褐色軽石は、古墳時代住居址の覆土において多く、弥生時代住居址の覆土において少ない。

以下に、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）と浅間 B テフラ（As-B）の概要について示す。

榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）は、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した降下火山灰（afa）と火砕流堆積物（pfl）からなり、分布は東（南）に 80km に及ぶ。主な鉱物は、角閃石（Ho）、斜方輝石（Opx）、菫青石（Cd）である。火山ガラスの屈折率は 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率は 1.707-1.711、角閃石の屈折率は 1.671-1.695 である（町田・新井，2003）。なお、FA の噴出年代としては、FA 初期火山灰中の倒木の AMS 放射性炭素年代測定に基づくウィグルマッチングにより、AD 491-500 年が得られている（早川ほか，2015）。

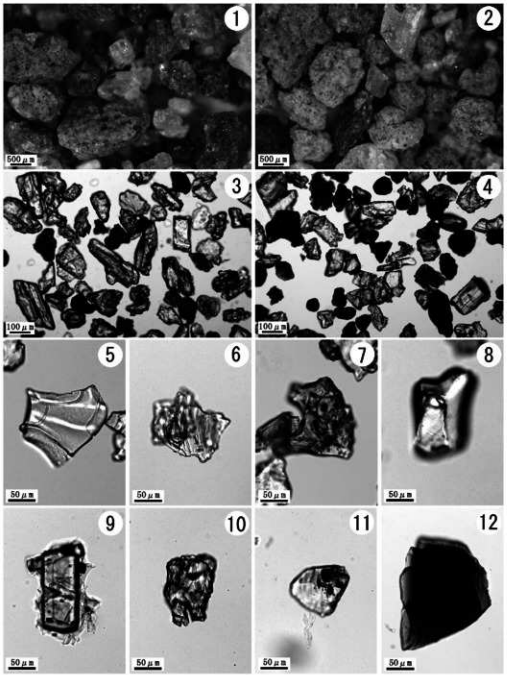
浅間 B テフラ（As-B）は、AD 1108 年（天仁 1 年）に浅間火山から噴出した降下軽石（pfa）、降下スコリア（sfa）、降下火山灰（afa）からなり、分布は東に 150km 以上に及ぶ。主な鉱物は、斜方輝石（Opx）と単斜輝石（Cpx）である。軽石ガラスの屈折率は 1.524-1.532、斜方輝石の屈折率（γ）は 1.708-1.710 である（町田・新井，2003）。

引用文献

早川由紀夫・中村賢太郎・藤根　久・伊藤　茂・廣田正史・小林紘一（2015）榛名山で古墳時代に起こった渋川噴火の理学的年代決定．群馬大学教育学部紀要　自然科学編，63，35-39.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336.

横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25，21-30.



1. 1φ篩残渣（南壁2）　2. 1φ篩残渣（南壁5）　3. 4φ篩残渣軽鉱物（北壁4）
4. 4φ篩残渣軽鉱物（南壁2）　5. バブル型Y字状火山ガラス（北壁4）
6. 軽石型スポンジ状ガラス（南壁1）　7. 軽石型スポンジ状褐色ガラス（南壁2）
8. 急冷破砕型フレーク状（北壁5）　9. 斜方輝石（南壁5）　10. 単斜輝石（南壁5）
11. カンラン石（南壁2）　12. 角閃石（南壁5）

第17図　堆積物中のテフラ粒子

写　真　図　版

調査区全景（東半）　上が北

調査区全景（西半）　上が北

図版２

調査区遠景（西半調査時）　南東から

調査区遠景（西半調査時）　東から

91 号墳全景　南西から

91 号墳全景　上が北

91 号墳周溝（西側）全景　北東から

91 号墳周溝（東側）全景　北西から

91 号墳セクションA　南から

91 号墳セクションB　南から

91 号墳セクションC（倒木痕）　東から

地境隅に集積された石室石材　南東から

図版４

１号住居址（床面）全景　北西から

１号住居址（掘方）全景　南西から

２号住居址（床面）全景　南東から

２号住居址遺物出土状況　南から

３号住居址（床面）全景　南東から

１～４号住居址セクションＡ（北東半）　北西から

１～４号住居址セクションＡ（南西半）　北西から

１～４号住居址セクションＢ　北東から

1～4号住居址セクションC（西寄り） 南から

1～4号住居址セクションC（東寄り） 南から

1～4号住居址セクションD 北から

SD1 全景 北西から

SD1・3・4 全景 北西から

SD1・3・4 セクション（調査区西半調査時） 北西から

SD1・3・4 セクション（調査区東半調査時） 北から

SD2 全景 北西から

図版 6

SD2 セクション　北から

SK1 全景　東から

SK1 セクション　北から

SK3 全景　東から

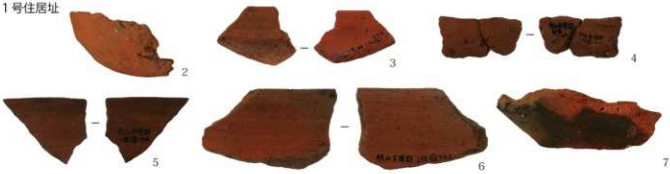
SK3 セクション　北から

SK4 全景　東から

SK4 セクション　北から

9 月 3 日調査区冠水の状況　西から

1号住居址



2号住居址

3号住居址

91号墳

1号溝状遺構

2号溝状遺構

図版 8

遺構外

29
30
31
32
35
37
38
42
43
46
39
47
51
55
57
53
66
67
52
60
68
69
70
71
73

報告書抄録

ふりがな	あきやまこふんぐん２　あきやまつかばらちくＣちてんのちょうさ
書名	秋山古墳群Ⅱ
副書名	秋山塚原地区Ｃ地点の調査
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 62 集
編著者名	櫻井　和哉　　髙林　真人　　藤根　久　　鈴木　正章
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367 － 8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
発行年月日	令和２年３月６日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
秋山古墳群Ⅱ 秋山塚原地区 Ｃ地点	埼玉県本庄市児玉町秋山 1464-2，-5、1488-9	112119	54-053	36° 15′ 06″	139° 09′ 28″	20180720 ～ 20181011	245	市道拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋山古墳群Ⅱ 秋山塚原地区 Ｃ地点	集落跡 古墳	弥生時代～古墳時代 中世 近世 古墳時代後期	竪穴住居址　４棟 土坑　１基 溝跡　４条 土坑　２基 周溝　１条	弥生土器・土師器・埴輪 陶磁器・羽口・鉄砲玉 埴輪・土師器	

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第 62 集

秋 山 古 墳 群 Ⅱ

－秋山塚原地区Ｃ地点の調査－

令和２年３月６日　印刷
令和２年３月６日　発行

発行／本庄市教育委員会
〒 367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
電話　0495-25-1185

印刷／上毎印刷工業株式会社